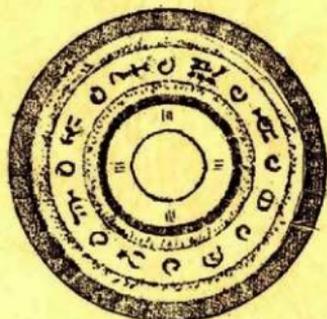


ARI TA KO TA BE  
有 田・小 田 部 28

—有田遺跡群第175次・177次・179次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集



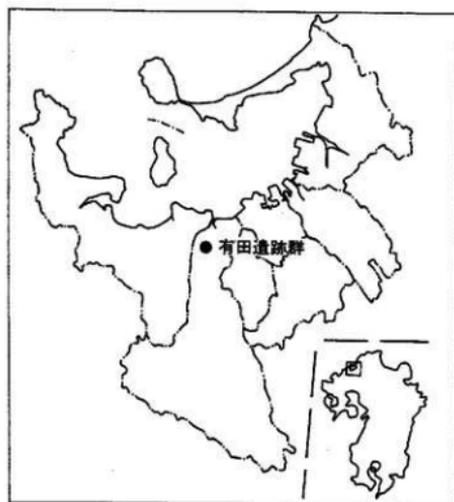
1 9 9 7

福岡市教育委員会

あり た こ た べ  
有 田 ・ 小 田 部 28

— 有田遺跡群第175次・177次・179次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集



遺跡略号	調査番号
ART-175	9401
ART-177	9422
ART-179	9524

1 9 9 7

福岡市教育委員会



(1)第177次調査ST001(左)・002出土銅鏡



(2)第177次調査ST001(右)・002(南東から)

## 序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行なっています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は民間の共同住宅建設に伴い調査を実施した右田遺跡群第175次・177次・179次調査の成果を報告するものです。これらの調査では中国漢代の鏡や銅矛の銜型が出土するなど、本遺跡群のみならず早良平野の社会構造を考察するうえでも、貴重な資料を得ることができました。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、ご理解とご協力を賜りました数多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田 英俊

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、早良区小田部2丁目、5丁目地内において発掘調査を実施した有田遺跡群第175次・177次・179次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

調査次数	調 査 地	調査番号	遺跡略号	調査面積	調 査 期 間
第175次	早良区小田部5丁目160番地他	9401	ART 175	656㎡	1994・4・4～6・7
第177次	早良区小田部5丁目150-3番地	9422	ART-177	480㎡	1994・6・20～7・29
第179次	早良区小田部2丁目102番地他	9524	ART-179	120㎡	1995・8・28～9・12

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は第175次・177次調査を榎本義嗣・黒田和生、第179次調査を大塚紀宜が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は第175次・177次調査を榎本、第179次調査を大塚が行なった。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は第175次・177次調査を榎本、第179次調査を大塚が行なった。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は第175次・177次調査を平川敬治、第179次調査を大塚が行なった。
7. 本書に掲載した挿図の製図は第175次・177次調査を榎本、第179次調査を大塚が行なった。
8. 本書の遺構配置図に記した座標は国土調査法第II座標系に拠っている。
9. 本書で用いた方位は座標北で真北より0°18'西偏する。
10. 遺構の呼称は竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、欄列をSA、甕棺墓をST、土坑をSK、貯蔵穴をSU、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
11. 遺構・遺物番号は各調査次ごとの通し番号とした。なお、挿図中と図版中の遺物番号は一致する。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13. 本書の執筆はI-2.2)およびVを大塚、他を榎本が行なった。
14. 本書の編集は大塚の協力を得て、榎本が行なった。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
1) 第175次・177次調査	1
2) 第179次調査	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 第175次調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	8
1) 竪穴住居	8
2) 掘立柱建物	11
3) 甕棺墓	11
4) 土坑	13
5) 溝	15
6) ビット	20
3. 小 結	20
IV. 第177次調査の記録	21
1. 調査概要	21
2. 遺構と遺物	24
1) 櫛 列	24
2) 甕棺墓	24
3) 土 坑	29
4) 貯蔵穴	29
5) 溝	33
3. 小 結	34
V. 第179次調査の記録	35
1. 調査概要	35
2. 遺構と遺物	36
1) 竪穴住居	36
2) 土 坑	36
3) 溝	38
4) 包含層	40
3. 小 結	44
VI. 結 語	45
1. 有田遺跡群内における甕棺墓地	45
2. 銅鏡について	47
3. おわりに	48

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図(1/50,000).....	3
第2図	調査区位置図(1/8,000).....	4
第3図	第175次調査区位置図(1/1,000).....	6
第4図	第175次調査区遺構配置図(1/200)および北壁土層図(1/100).....	7
第5図	SC010-011-012実測図(1/50).....	8
第6図	SC011-012出土遺物実測図(1/3).....	9
第7図	SB051実測図(1/80).....	9
第8図	SB052-053-054-055実測図(1/80).....	10
第9図	ST001実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8).....	11
第10図	SK002-004-005-006-007-008実測図(1/30、1/40).....	12
第11図	SK004-005-007-008-015出土遺物実測図(1/3、1/4).....	14
第12図	SK015実測図(1/40).....	15
第13図	SD003出土遺物実測図(1)(1/3、1/4).....	16
第14図	SD003出土遺物実測図(2)(1/3、1/4).....	17
第15図	SD003出土遺物実測図(3)(1/3、1/4).....	18
第16図	SD003-016実測図(1/40、1/60).....	19
第17図	SP009実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3).....	20
第18図	第177次調査区位置図(1/1,000).....	22
第19図	第177次調査区遺構配置図(1/200)および北壁土層図(1/100).....	23
第20図	SA016実測図(1/80).....	24
第21図	ST001-002-003実測図(1/30).....	24
第22図	ST001-002出土遺物実測図(1)(1/8).....	25
第23図	ST001-002出土遺物実測図(2)(1/1).....	26
第24図	ST003出土遺物実測図(1/8).....	27
第25図	SK010-014実測図(1/30、1/60).....	28
第26図	SU005-006実測図(1/40).....	29
第27図	SU005出土遺物実測図(1/3).....	29
第28図	SU006出土遺物実測図(1)(1/3).....	30
第29図	SU006出土遺物実測図(2)(2/3、1/2).....	31
第30図	SD007-008-009-012実測図(1/20、1/60).....	32
第31図	SD007出土遺物実測図(1/3).....	32
第32図	SD008出土遺物実測図(1/3、1/4).....	33
第33図	第179次調査区位置図(1/300).....	35
第34図	第179次調査区遺構配置図(1/100).....	36
第35図	SC01実測図(1/60).....	37
第36図	調査区北壁・東壁土層図(1/100).....	37
第37図	SK04実測図(1/60).....	38
第38図	竪穴住居・土坑・溝出土遺物実測図(1/3).....	39

第39図	包含層出土遺物実測図(1) (1/6) .....	40
第40図	包含層出土遺物実測図(2) (1/3) .....	41
第41図	包含層出土遺物実測図(3) (1/3) .....	42
第42図	包含層出土遺物実測図(4) (1/2) .....	43
第43図	有田遺跡群における弥生時代墓地位置図(1/15,000) .....	45
第44図	A地点甕棺墓配置図(1/500) .....	46
第45図	漁隠洞遺跡出土C鏡(1/1) .....	48

## 図 版 目 次

巻頭図版	(1)第177次調査ST001(左)・002出土銅鏡	(2)第177次調査ST001(右)・002(南東から)	
図版 1	第175次調査 (1)調査区全景(東から)	(2)調査区全景(北から)	
図版 2	第175次調査 (1)SC010(西から)	(2)SC011(西から)	(3)SC012(西から)
図版 3	第175次調査 (1)SB051(北から)	(2)SB052・053(北から)	(3)SB054(北から)
図版 4	第175次調査 (1)SK005(北から)	(2)SK006(北から)	(3)SK015(北から)
図版 5	第175次調査 (1)SD003(北から)	(2)SD016(南から)	(3)SP009(西から)
図版 6	第175次調査出土遺物		
図版 7	第177次調査 (1)調査区全景(東から)	(2)調査区全景(南東から)	
図版 8	第177次調査 (1)ST001・002(南東から)	(2)ST001(南東から)	(3)ST001(北東から)
図版 9	第177次調査 (1)ST001銅鏡出土状況	(2)ST002(南東から)	(3)ST002銅鏡出土状況
図版10	第177次調査 (1)SK010(南から)	(2)SU005(東から)	(3)SU006(北から)
図版11	第177次調査 (1)SD007・008・009(南から)	(2)SD008(南から)	(3)SD012(南から)
図版12	第177次調査出土遺物(1)		
図版13	第177次調査出土遺物(2)		
図版14	第177次調査出土遺物(3)		
図版15	第179次調査 (1)調査区全景(北西から)	(2)調査区北壁土層	(3)調査区東壁土層
図版16	第179次調査 (1)SC01(北から)	(2)SK04(南から)	(3)SD07(南から)
図版17	第179次調査出土遺物(1)		
図版18	第179次調査出土遺物(2)		

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

### 1) 第175次調査

1993年10月1日、毛利三男氏より本市教育委員会に早良区小田部5丁目160・161・163・164番地における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では1994年2月16日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行なった結果、建物部分の810㎡を対象として発掘調査を同年4月4日より実施することとなった。

### 2) 第177次調査

1994年4月6日、金子亮司氏より本市教育委員会に早良区小田部5丁目150-3番地における共同住宅建設に伴う同願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では同年5月10日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行なった結果、建物部分の530㎡を対象として発掘調査を同年6月20日より実施することとなった。

### 3) 第179次調査

1995年3月28日、榑佐田ビル 佐田信義氏より本市教育委員会に早良区小田部2丁目102番地地における店舗付共同住宅建設に伴う同願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では同年8月1日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行なった結果、建物部分のうち遺構に影響及ぼす可能性のある120㎡を対象として発掘調査を同年8月28日より実施することとなった。

## 2. 調査の組織

### 1) 第175次調査・第177次調査

**調査委託:** 毛利三男 (第175次調査) 金子亮司 (第177次調査)  
**調査主体:** 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課  
**調査総括:** 埋蔵文化財課長 折尾 学 (前任) 荒巻輝勝 (現任)  
同課第1係長 横山邦継  
**調査庶務:** 同課第1係 吉武麻由美 (前任) 西田結香 (現任)  
**事前審査:** 同課第2係主任文化財主事 山口譲治 (前任) 松村道博 (現任)  
同課第2係文化財主事 菅波正人 (前任) 池田祐司 (現任)  
**調査担当:** 同課第1係文化財主事 榑木義嗣  
**調査員:** 黒田和生  
**整理作業:** 西島信枝 松尾真澄

### 2) 第179次調査

**調査委託:** 榑佐田ビル 佐田信義  
**調査主体:** 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課  
**調査総括:** 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝  
同課第1係長 横山邦継  
**調査庶務:** 同課第1係 西田結香  
**事前審査:** 同課第2係主任文化財主事 山崎龍雄 (前任) 松村道博 (現任)  
同課第2係文化財主事 池田祐司  
**調査担当:** 同課第1係文化財主事 大塚紀立  
**整理作業:** 大瀬良清子 上斐崎孝子 松本藤子 三栗野明美 村嶋里子

## II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に脊振・三都山系をひかえる福岡市には、これらの山系より派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、西側から今宿、早良、福岡、粕屋平野とよばれる。各平野ともに古くから独自の歴史的、地理的環境を有している。

今回報告する有田遺跡群の位置する早良平野は西側を脊振山系から派生する飯盛・長垂山塊に、東側を油山山塊によって区切られ、平野中央部には室見川が博多湾へと北流する。沿岸部には帯状に砂丘が形成され、下流部には第三紀丘陵と洪積台地が点在するが、平野の大半は室見川を主にその支流である金屑川や十郎川による沖積作用によって形成されている。

このうち、有田遺跡群は平野中央北側の室見川下流部東岸に位置する洪積世独立中段丘上に展開する。この台地は南北約1.7km、東西0.7kmに拡がり、最高所では標高約15mを測る。西側を室見川、東側を金屑川に浸食されるため、東西には小段丘陵が形成される。また、北側からは浅く長い谷が複数開析し、八手状に舌状の支丘が延びる複雑な地形を呈する。この台地は阿蘇火山灰に由来しており、下層より八女粘土層、鳥栖ローム層、新时期ローム層が堆積する。

本遺跡群の発掘調査は区画整理事業に伴う、67年の九州大学による調査を端緒とし、75年以降は本市教育委員会による緊急調査を主体に、現在まで180数次にわたり実施されてきた。以下、時代別に既往調査から得られた知見を概略する。

古くは旧石器時代から先人の生活の痕跡をみることができ、上述した新时期ローム層には該期の遺物が包含されることが多い。しかし、中世以降の削平により遺存状況は悪く、混入を含め10数箇所の調査区でナイフ形石器・ポイントが出土しているにとどまる。

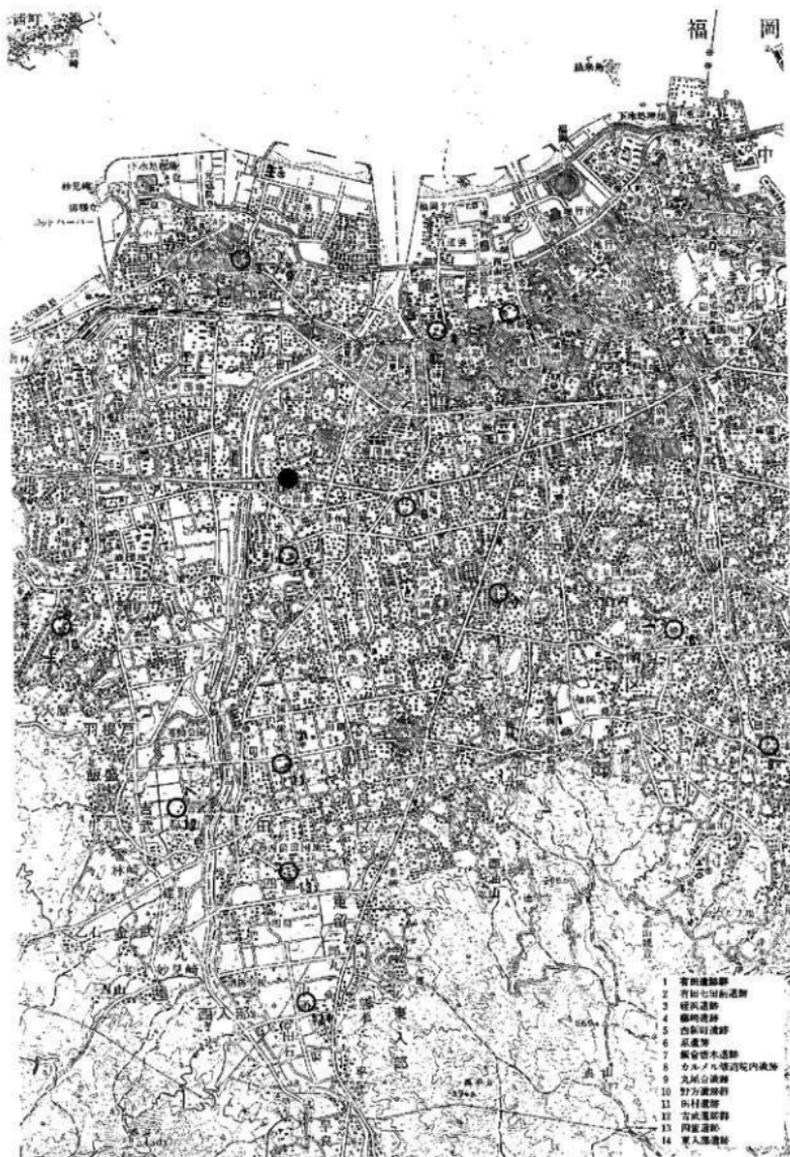
縄文時代では台地の南西部において環状に配される中後期の貯蔵穴群が検出されている。また、晩期の突帯文土器単純期においては本遺跡群南西の沖積地内に立地する有田七田前遺跡で、該期の土器と共に大陸系磨製石器が出土し、初期水稻農耕文化の伝播を考察する上で重要である。

弥生時代では前期初頭に台地の高所部には平面楕円形を呈し、長径約300m、短径約200mを測ると推定される断面「V」字形の環濠が巡る。また、後統する板付IIa式段階において掘削された環濠も確認されているが、規模等は不明な点が多く、数箇所に環濠が分布している可能性も高い。中期以降は集落、墓地が散在するものの、甕棺墓からは副葬品として細形銅戈や今回報告するように銅鏡の出土例があることや、青銅器製作を裏付ける鑄型の出土が今回の報告を含め、4例目となることから平野内の拠点集落の一つであったことが伺い知れる。後期以降は急速に集落規模が縮小するが、終末期には古墳時代に継続する集落が台地各所で検出される。

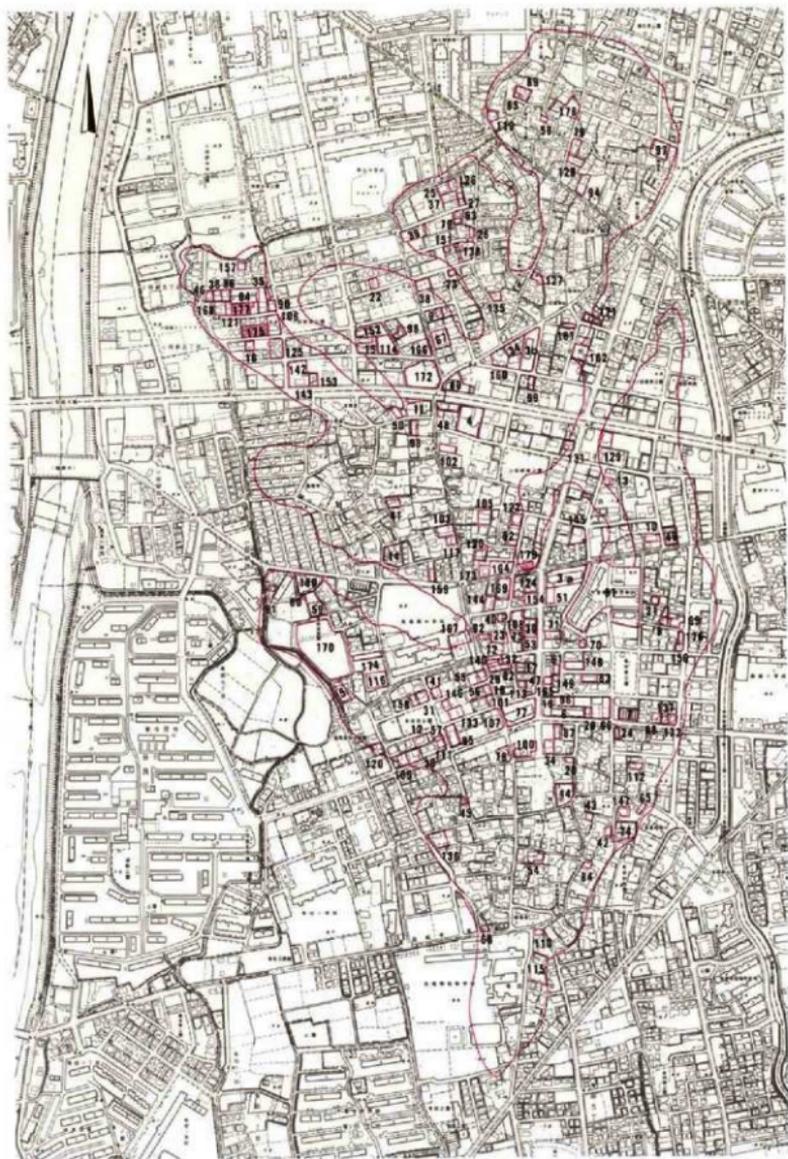
古墳時代においては台地北東部において大形の円墳が造営されることから、一定勢力を有する集団の存在が推察される。6世紀後半頃には台地高所に一本柱の柵列が出現するが、規模や関連施設については不明である。その後には3本柱柵列に囲まれた倉庫群が台地の数箇所で確認されている。いわゆる「那津官家」との関連が考えられるが、今後の検討を要する遺構群である。

古代においても台地高所において官衙、あるいは居館と推定される区画を有する大形建物群が検出されているが、全体像の把握には至っていない。

中世では15～16世紀代の遺構が多数認められる。大内氏の筑前支配により早良郡代が配置され、その一人大村興景の屋敷地が本報告の台地北東部に存在したことが古文書や字名から推定できる。その後は大友氏へと支配が移り、その被官であった小田部氏の里城である小田部城が台地南部に築かれる。



第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)



第2图 調査区位置图(1/8,000)

### III. 第175次調査の記録

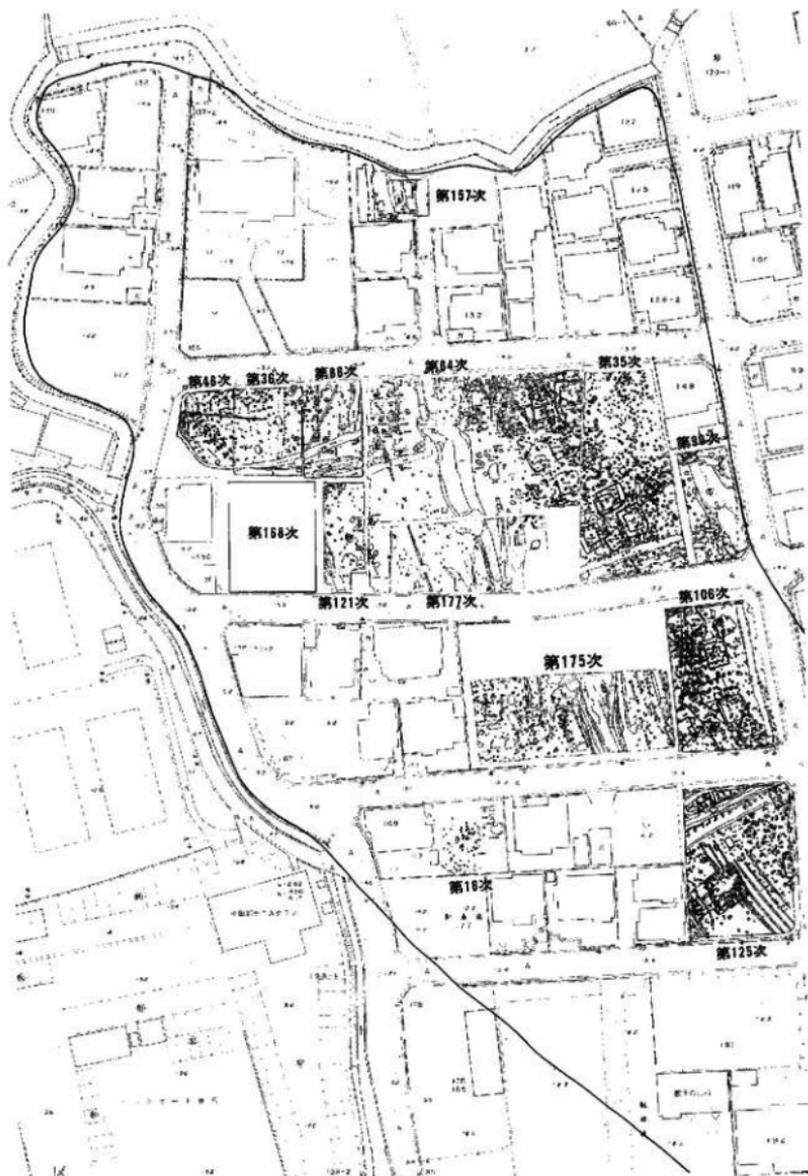
#### 1. 調査概要

第175次調査区は早良区小田部5丁目160・161・163・164番地に所在し、現況は平地の宅地である。有田遺跡群の北西端に延びる長さ約400m、幅約80～120mの舌状を呈する標高5～7m前後の支丘上に位置している。この支丘の東側には狭い谷が開析し、西側は室見川による浸食による小段丘陵を形成している。調査区は第4図の上層図に示すように遺構面が東側から西側に向かって緩く傾斜しており、丘陵尾根線付近から西側緩斜面に立地するものと考えられる。調査区周辺の東西方向の既存道路にも支丘の傾斜の名残が遺存している。なお、尾根線の位置する東側は削平により西側に比して遺構の遺存状況が良くない。南北方向では北側に傾斜を有するが、極めて緩やかである。遺構面の標高は約5.4m～5.9mを測る。

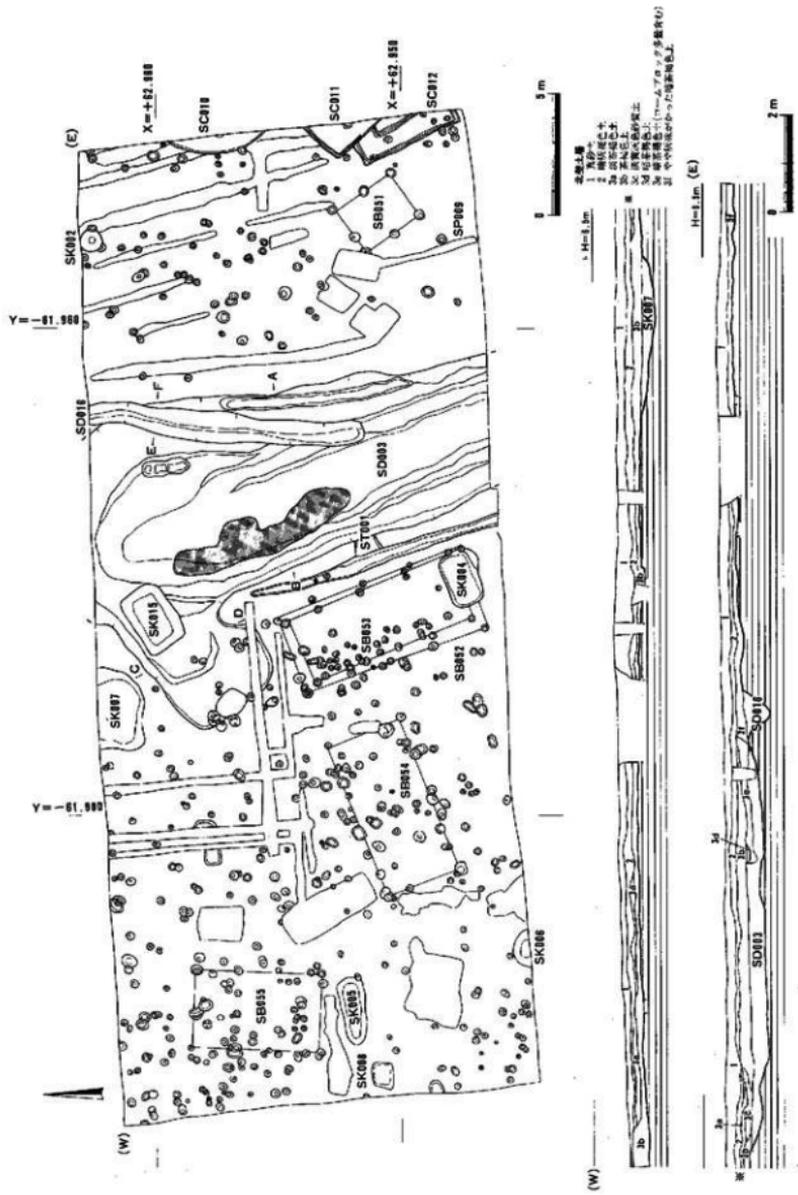
本調査区の遺構は表土下約25～40cmの黄褐色を呈する烏桕ローム層の上面で確認した。上述したように遺構面は西側に向かって緩く傾斜するが、上層に遺物包含層は認められない。今回検出した遺構は弥生時代の竪穴住居・甕棺墓、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱建物・土坑・溝等である。調査区東側には畝跡と思われる南北方向の浅い溝状の擾乱が徒走する。

該地周辺は本遺跡群中で調査が比較的多く実施されており、本調査区の報告を述べる前に当支丘上の既往の周辺調査成果について触れておく(第3図参照)。まず、西接する第106次調査区は尾根線を挟み東側緩斜面に位置し、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物、中世の溝が確認されている。同調査区の南側に位置し、同一斜面上に立地する第125次調査区においては同様の遺構の他に弥生時代前期の竪穴住居・貯蔵穴が検出されている。この前期の貯蔵穴は南西に位置する第16次調査区においても認められる。また、本調査区北側の街区一帯は大半で調査が実施されており、弥生時代では前期の貯蔵穴および前期～後期にわたる甕棺墓、弥生時代終末から古墳時代にかけては上述した第106次・125次調査区に連なる東側斜面を中心に、合わせて竪穴住居60数軒が連続と築かれる。なお、西側斜面に立地する第168次調査においても同一時期の竪穴住居が検出されているが、少数である。また、古墳時代後期には支丘の端部を占地するように3×4間の総柱建物2棟とそれらを圍繞する3本柱の柵列が造営される。その規模は推定で約49m×52mを測り、長辺は丘陵の延伸方向にほぼ一致する。また、西北端の第46次調査区ではこの柵列と約12mの間隔を有し並行する同様の3本柱の柵列が確認されている。古代には遺物は散見するものの明確な遺構は認められない。中世は後半を中心に当丘陵上では溝状遺構が設けられる。方形を呈し、区画溝と考えられるものもあるが、断片的に複数が確認されており、時間差を有すると思われる。なお、当支丘は「中園」という字名を称しており、「中園名」や大内氏の早良郡代であった大村興景の知行地である「下中園屋敷」が存在したことが古文書に記されていることから、強い関連が看取される。

今回の調査は1994年4月4日、重機による表土剥ぎから開始し、翌日から遺構検出を実施した。調査区内のトラバース設定にあたっては国土座標を用いた。遺構番号は3桁の通し番号とし、001から遺構の種類にかかわらず付しており、番号に欠番はあるが重複ない。なお、以下の報告にあたっては原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号を組み合わせて記述する。調査は遺構実測終了後の同年6月4日に重機による埋め戻しを実施し、6月7日に器材を撤収して完了した。今回の調査は開発面積1,244㎡のうち、建物部分を対象に実施し、発掘調査面積は656㎡である。



第3图 第175次调查区位置图(1/1,000)



第4図 第175次調査区遺構配置図(1/200)および北壁土層図(1/100)

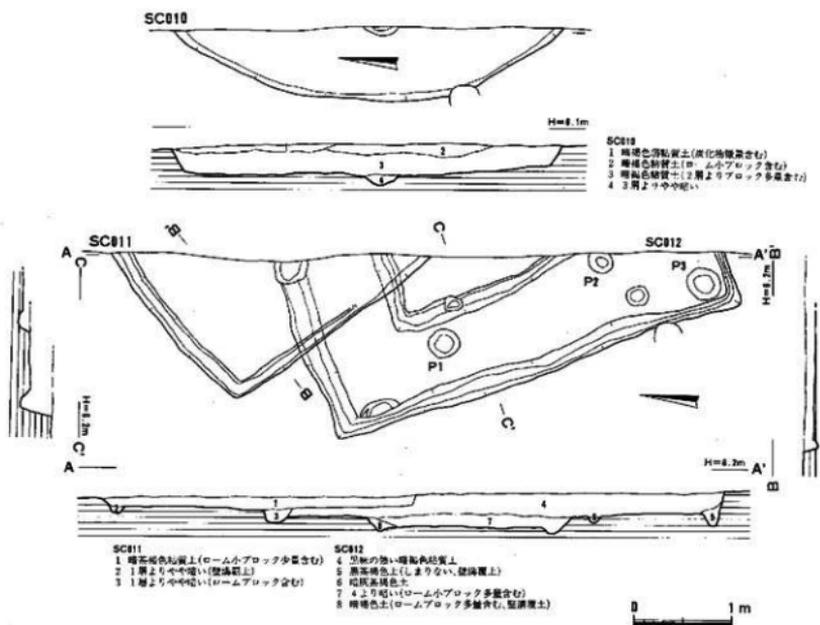
## 2. 遺跡と遺物

### 1) 竪穴住居

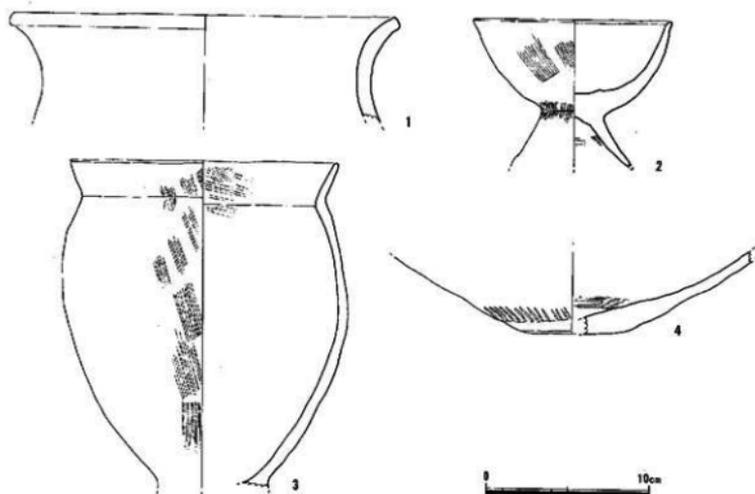
**SC010** (第5図) 調査区東端で検出した復元径約6mを測る円形の竪穴住居で、大半が調査区外に位置する。壁は20~25cmが遺存している。床面では中央の調査区際で深さ10cm程度の柱状の掘り込みを確認したのみで、他には検出できなかった。覆土は暗褐色粘質土を主体とする。出土遺物には弥生土器の細片と黒曜石の剥片がある。

**SC011** (第5図) SC010の南側で検出した。遺構の東側大半は第106次調査区に位置しており、本調査区内では北西コーナー部分のみを確認した。一辺約6mの方形を呈すると考えられ、SC012を切る。壁は約10cm程度しか遺存していない。壁際には幅約15cm、床面からの深さ約5cmの浅い壁溝が巡るが、SC012との重複した床面では壁溝の延長部の検出が困難であった。調査区際に深さ約15cmの掘り込みを有する。

出土遺物(第6図1・2) 共に床面からやや浮いた状態で出土した。1は復元口径23.0cmを測る土師器甕で、口縁部は緩く外反し、端部を僅かに肥厚させる。頸部外面に沈線状の擦過痕が一部認められるが、他は器面の荒れがすすみ、調整は不明である。2は高坏で復元口径12.0cm、残存器高8.9cmを測る。椀状を呈する坏部の口縁部は外方に延びるが、端部を極緩く外反させる。脚部は直線的に開くが、端部を欠失する。全体に器面が風化するが、外面および脚部内面には細かい刷毛目が残る。他に



第5図 SC010-011-012実測図(1/50)

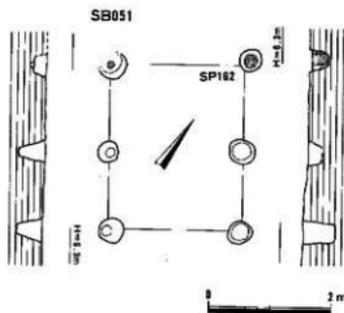


第6図 SC011・012出土遺物実測図(1/3)

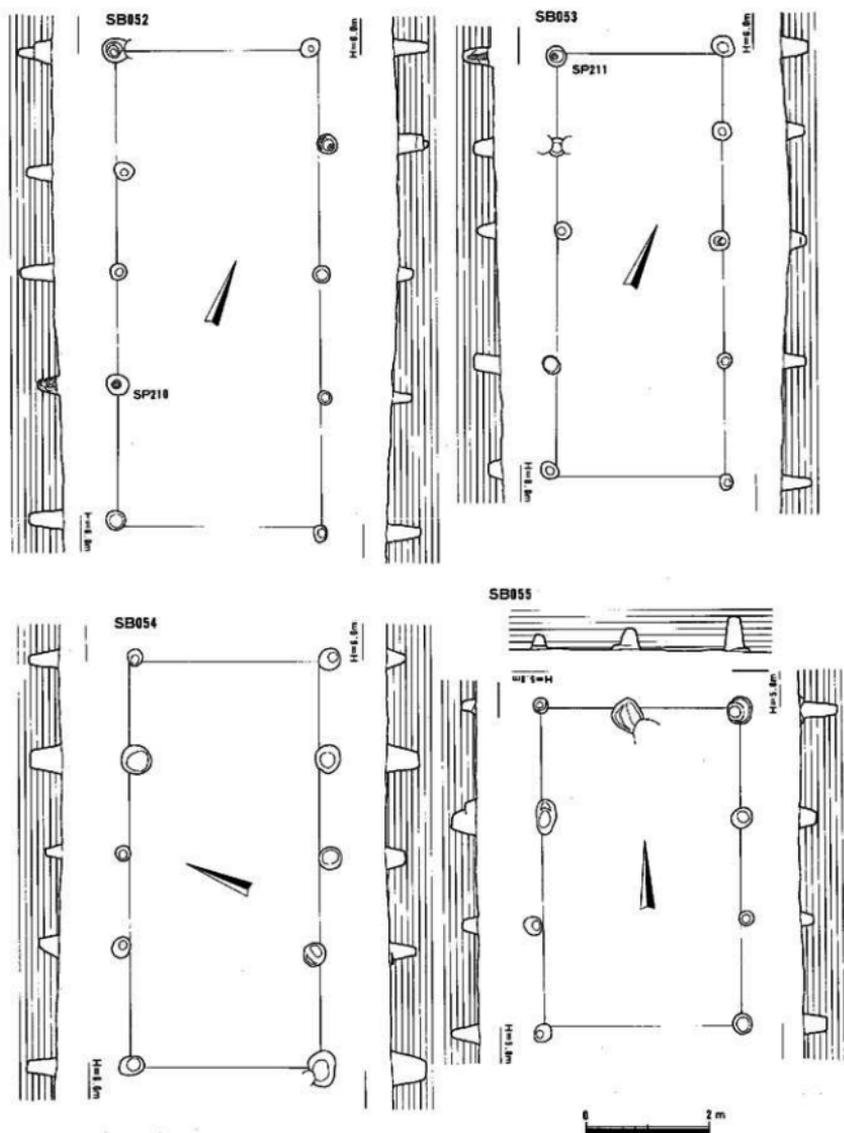
土師器の細片が出土しているが、須恵器は含まれない。

SC012(第5図) 調査区の南東端で検出した方形を呈する竪穴住居で、SC011に切られる。011同様に東側は第106次調査区に延びる。壁は高さ約20cm、本調査区内で検出した一辺は4.3mを測る。壁に沿って幅60~80cm、高さ約10cmの地山成形のベッド状遺構を設置し、壁際およびベッド際に幅15~20cm、深さ5~10cmの小溝が巡る。ベッドの上面ではP1・P2のビット状の掘り込みを検出し、それぞれ径30・25cm、深さ10・20cmである。また南西隅で検出した径30~40cm、深さ15cmのP3の覆土中およびその周辺では焼土塊、炭化物が散在していた。

出土遺物(第6図3・4) 3はP3の上層で出土した弥生土器の付付き甕であるが、台の大半を欠失する。口縁部は「く」字形に外反するが、外面の稜はやや鈍い。胴部上位から中位に最大径を有し、底部にかけては直線的にすぼまる。復元口径16.2cm、残存器高19.8cmを測る。器面の剥落がすすむが、口縁部内面および外面には刷毛目が残し、体部内面にはヘラナデを施す。胴部中位から口縁部にかけて黒斑が認められる。4は壺もしくは鉢の底部片である。器面の磨滅により調整は不明瞭であるが、外面には斜方向の叩き、内面には僅かに刷毛目が観察できる。他にも外面に叩きを有する部位不明片、細片が少量出土している。



第7図 SB051実測図(1/80)



第 8 图 SB052·053·054·055 实例区 (1/80)

## 2) 掘立柱建物

**SB051**(第7図) 調査区南西で検出した1間×2間の側柱建物で、主軸方向はN 35° Wである。桁行は全長2.7m、柱間1.3~1.4m、梁間は2.2mを測る。柱穴は円形を呈し、径約40cm、深さ25~40cmで、覆土は暗褐色土を主体とする。SP162のみ径18cmを測る柱痕を確認できた。出土遺物には弥生土器・土師器の細片が少量、黒曜石剥片が数点ある。

**SB052**(第8図) 調査区の中央南寄りで確認した1間×4間の側柱建物で、西側桁行の柱穴がSB053の柱穴を切っており、前後関係を把握できる。また、北東隅の柱穴はSK004を切る。主軸方向はN 20° Wである。桁行全長7.8m、柱間は1.5~2.1mと不規則である。梁間は3.3mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形で、径25~40cm、深さ25~55cmである。覆土はSB051と異なり、やや灰味があった茶褐色土を早する。SP210では径15cmの柱痕が認められた。遺物は少量で、土師質と思われる土器の細片が数点出土しているのみである。

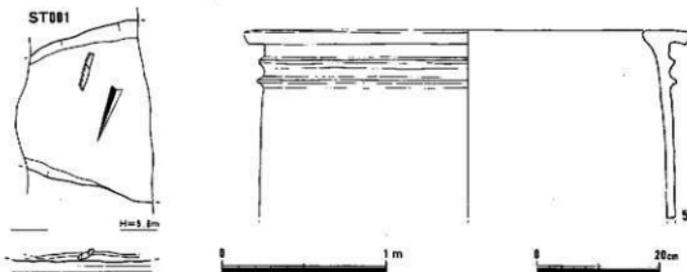
**SB053**(第8図) SB053に切られる1間×4間の側柱建物である。主軸方向はN 23° Wで、SB052よりやや西に振れているものの、柱穴の重複関係や位置からSB052の礎替え前の建物と推測される。また、北東隅の柱穴はSK004を切る。桁行全長は西側が6.9m、東側が7.2m、柱間は1.5~2.1mを測る。梁間は北側が2.7m、南側が2.9mで、SB052に比して規模が小さい。柱穴の径は25~35cm、深さは25~45cm、覆土はSB052と類似する。SP211で径10cmの柱痕を確認した。出土遺物には土師器・瓦質土器の細片が数点ある。

**SB054**(第8図) SB053の西側で検出した1間×4間の側柱建物である。上述したSB052・053とはほぼ直交するN-68° -Eの主軸方向を有する。桁行全長6.6m、柱間1.5~1.9m、梁間3.2mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径20~40cm、深さ20~50cmを測る。覆土は茶褐色土で、出土遺物には土師質土器、白磁の細片が少量ある。

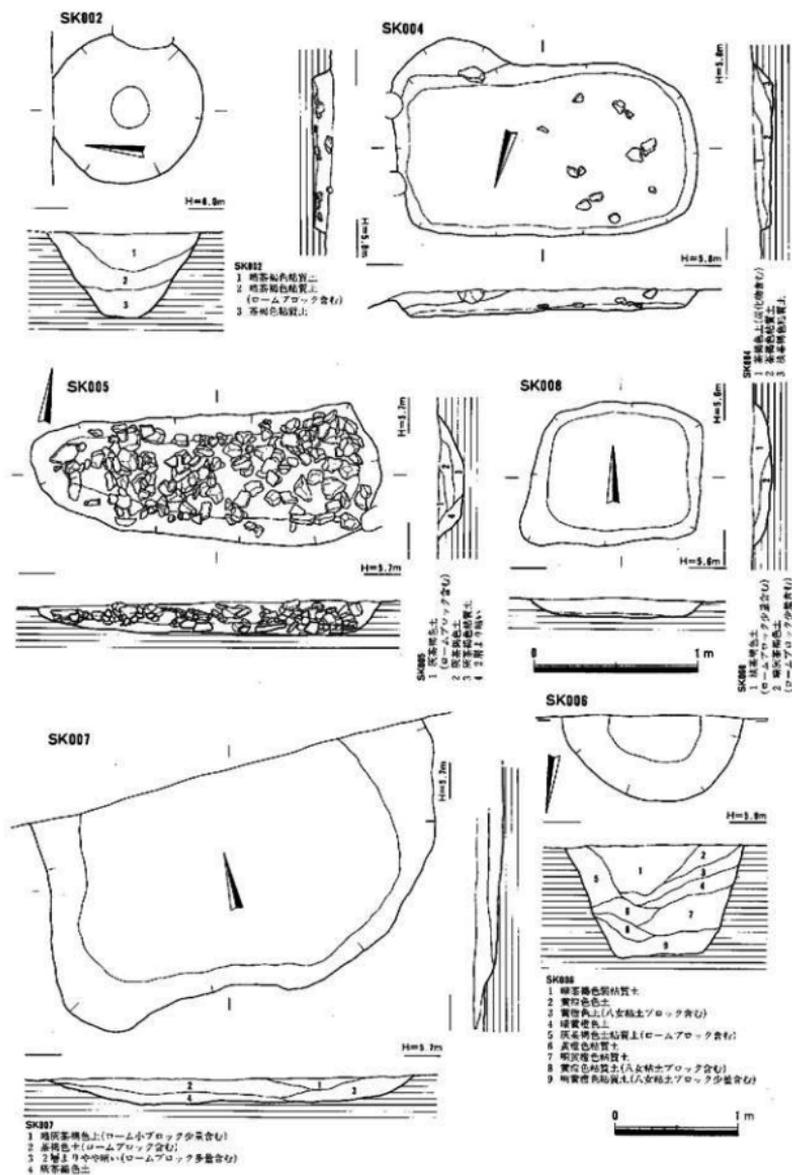
**SB055**(第8図) 調査区の北西に位置する2間×3間の側柱建物で、主軸方位はN-3° -Eにとる。桁行は西側が全長5.4m、東側が5.1m、柱間は1.6~1.8mを測る。梁間は3.3mで、北側の柱間は1.5、1.8m、南側では梁の中柱は検出できなかった。柱穴は円形、不整楕円形で、径20~55cm、深さ25~60cmである。覆土は茶褐色土を主体とする。出土遺物には土師質土器、陶器が数点あるが、細片のため図化し得ない。

## 3) 甍棺墓

**ST001**(第9図) 調査区の中央南側で検出した。墓城の東側をSD003に、西側も溝状遺構に切られる。また、雨平により墓城の底面から5cm程度しか残存せず、極めて遺存状況は悪い。遺構の掘り下



第9図 ST001実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8)



第10図 SK002・004・005・006・007・008実測図(SK002-008は1/30,他は1/40)

げによって確認できた甕棺は副部片数点で、主軸方位、埋置角度等は不明である。

出土遺物(第9図5) 墓坑内の甕棺と重機による表土剥ぎ取り時に当地点で採集したものとを接合した甕棺で、口径の1/6程度しか遺存しない。復元口径は71.2cm、残存する器高は31.2cmである。やや外方に傾斜する「T」字状の口縁部を有するが、内径部の張り出しは鈍い。口縁下には断面台形状の2条の突帯を巡らせる。調整は突帯の上下にヨコナデが残るが、他は器面の磨滅により不明である。淡黄褐色を呈し、胎土には細かい砂粒を多く含む。

#### 4) 土坑

SK002(第10図) 調査区の北東端に位置する円形プランの土坑である。北側は僅かに調査区外に延びる。径約0.9m、深さ0.5mを測り、底面に向かって漏斗状にすぼまる。覆土は茶褐色粘質土を主体とし、レンズ状に堆積する。出土遺物には土師器、須恵器器身の細片が少量ある。

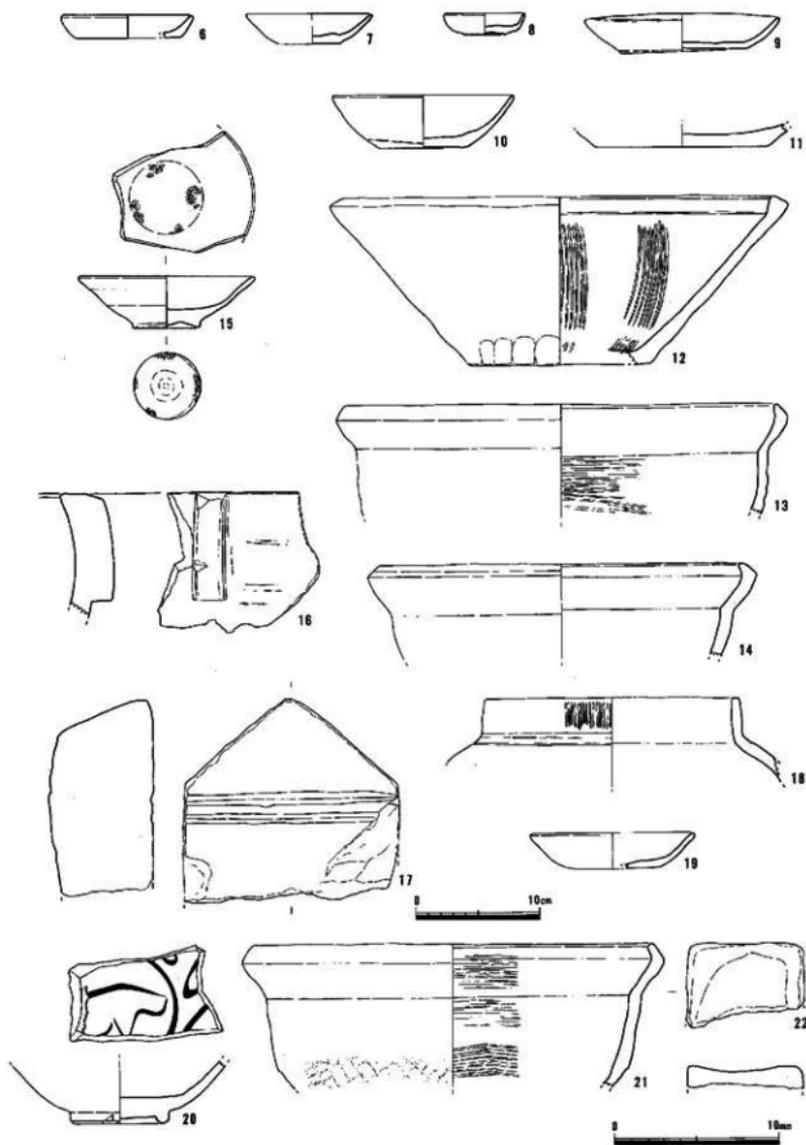
SK004(第10図) 調査区中央の南側で検出した。東端をSB052・053の柱穴によって切られる。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.4m、幅1.4m、深さ15cmを測る。断面は逆梯形をなし、底面は東側に緩く傾斜する。西側の底面を中心に小礫が散在する。

出土遺物(第11図6) 復元口径7.8cm、器高1.4cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、内外面にはヨコナデを施す。他の出土遺物には瓦質土器、白磁等の細片が少量ある。

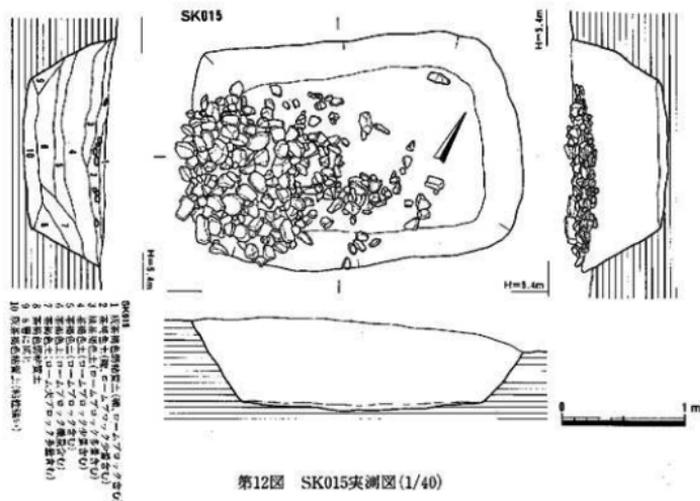
SK005(第10図) 調査区の西側に位置する。不整な隅丸長方形をなし、長さ2.8m、幅1.1m、深さ25cmを測る。断面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土中には拳大の礫が底面から上層まで廃棄状態で確認され、礫の一部には火を受けた痕跡がある。また、礫に混じる様に土器等の遺物が含まれる。

出土遺物(第11図7~17) 7~11は土師器である。このうち7・8は小皿で、7は復元口径7.6cm、器高1.8cmを測る。器面の風化がすすみ、外底部の切り離し法を含め、調整は不明である。8は復元口径4.8cm、器高1.3cmの小振りを皿で、外底部には回転糸切り痕が残る、他はナデである。9は口径11.8cm、器高2.5cmを測り、全体的にやや歪む。外底部は回転糸切りで、他は器面が荒れ、調整は不明瞭である。胎土中には2~3mmの砂粒が目立つ。10は復元口径10.8cm、器高3.2cmで、器面が風化する。胎土には多量の金雲母片を混じえる。11は復元で底径10.2cmを測り、厚手の器壁を有する。外底部は回転糸切り、外面ヨコナデ、内底部にはナデを施す。12は瓦質の椀形で、復元口径25.6cm、器高10.3cm、復元底径10.4cmを測り、9条の掃目を有する。底部から直線的に開き、口縁端部は内面に突出する。器面の風化がすすむが、内面には横方向の刷毛目が部分的に観察でき、外面は下半部に指オサエによる凹凸が認められる。13・14は体部の下半を欠失する瓦質の足鉢である。11縁部は「く」字状に開き、更に内側に短く折れる端部をつまみ出し、丸く収める。13は復元口径26.2cmを測り、口縁部内面はヨコナデ、体部には横方向の刷毛目を施す。外面は器面の大半が剥落する。14は復元口径21.6cmで、口縁部と体部との内面の境に稜を有する。調整は内外面ヨコナデである。なお、12~14はいわゆる周防型の瓦質土器である。15は李朝の青磁皿で、体部の中位で緩く屈曲する。復元口径10.6cm、器高3.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、全面に淡灰緑色の釉が施される。畳付部および内底部には目跡が残る。16は滑石製石鉢の口縁部で、方形の耳を有する。外面には削痕が残るが、内面ともに研磨する。17は砂岩製板碑の頭部で、幅17.4cm、厚さ8.3cmを測る。断面が鈍い「V」字形を呈する2条の横線彫りを施す。折損部には火受けの痕跡が認められる。また、出土遺物には弥生時代中期の甕および甕棺の破片が混入する。

SK006(第10図) 調査区の南西端で確認した円形をなす土坑で、南半部は調査区外に位置する。現存で径1.5m、深さ0.9mを測り、断面は逆梯形を呈する。底面は八女粘土まで掘込まれ、粘質土レンズ状



第11图 SK004·005·007·008·015出土遗物尖刺图(17は1/4、他は1/3)



第12図 SK015実測図(1/40)

に堆積する。出土遺物には土師器、陶器の細片が少量あるのみである。

**SK007(第10図)** 調査区の北側中央部で検出した。遺構の北側は調査区外に延びており、全容は不明であるが、現存で幅3.2m、深さ20cmを測る。断面浅皿状を呈し、壁面の立ち上がりは緩い。

出土遺物(第11図18) 復元口径15.2cmを測る瓦質の茶釜である。肩の張る体部に直立する短い口縁部を有する。口縁部外面には刷毛目工具により縦位の沈線が施される。他の出土遺物は細片が多く、土師質土器、瓦質土器、白磁等がある。また、弥生時代前期末の甕片片が混入する。

**SK008(第10図)** 調査区の西側部に位置する。長さ1.0m、幅0.9mを測る小型の正方形に近いプランを呈し、断面は浅皿状である。

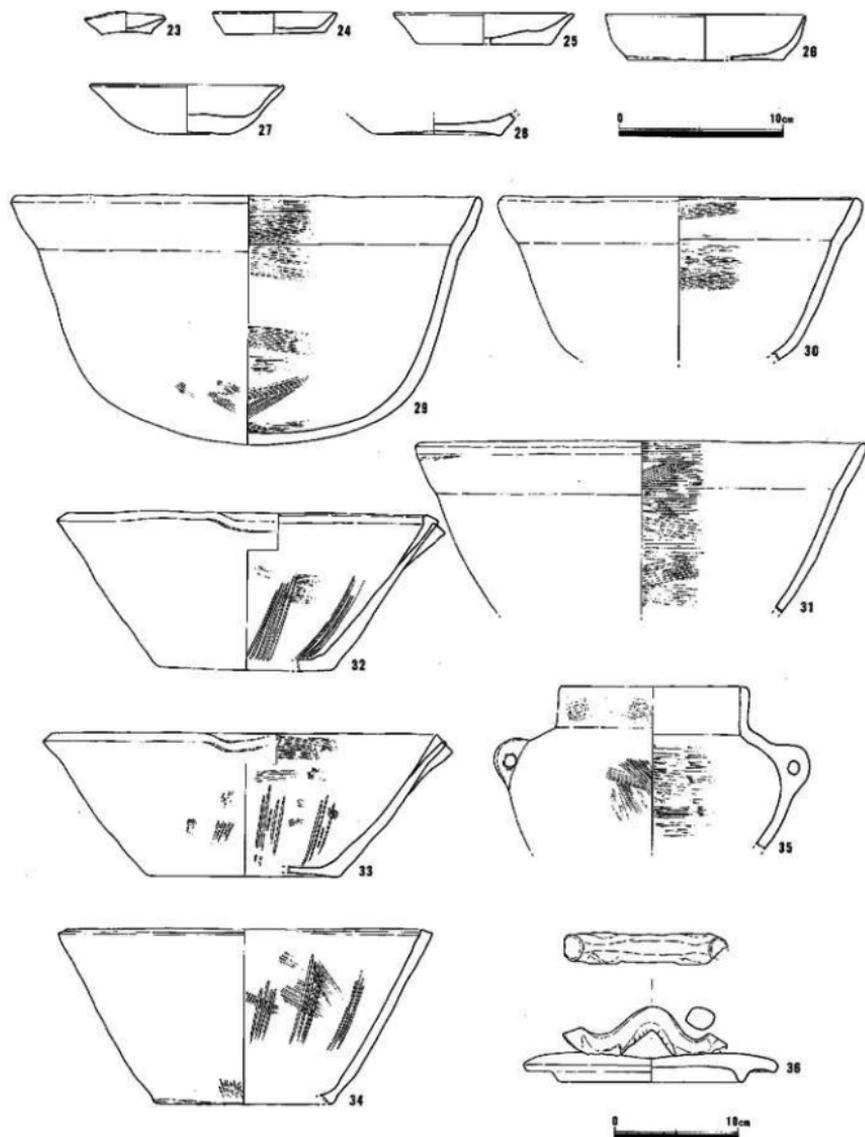
出土遺物(第11図19) 復元口径9.8cm、器高2.1cmを測る土師器器環で、外底部は回転系切りである。器面の磨滅により他の調整は不明である。他に土師質土器、砥石片が各1点出土している。

**SK015(第12図)** 後述するSD003の張り出し部を掘り下げた底面で確認した土坑である。隅丸長方形プランを呈し、長さ2.7m、幅1.9m、深さ0.7mを測る。断面は逆梯形をなし、八女粘土層まで掘り込まれる。壁面には凹凸があるものの、直線的な立ち上がりである。西半部の上層(1・2層)の厚さ20cm程には拳大の礫が敷きつめた様な状態で検出された。また、これらの礫の大半は赤褐色に赤変し、炭化物の付着が認められることから火を受けたものと考えられる。

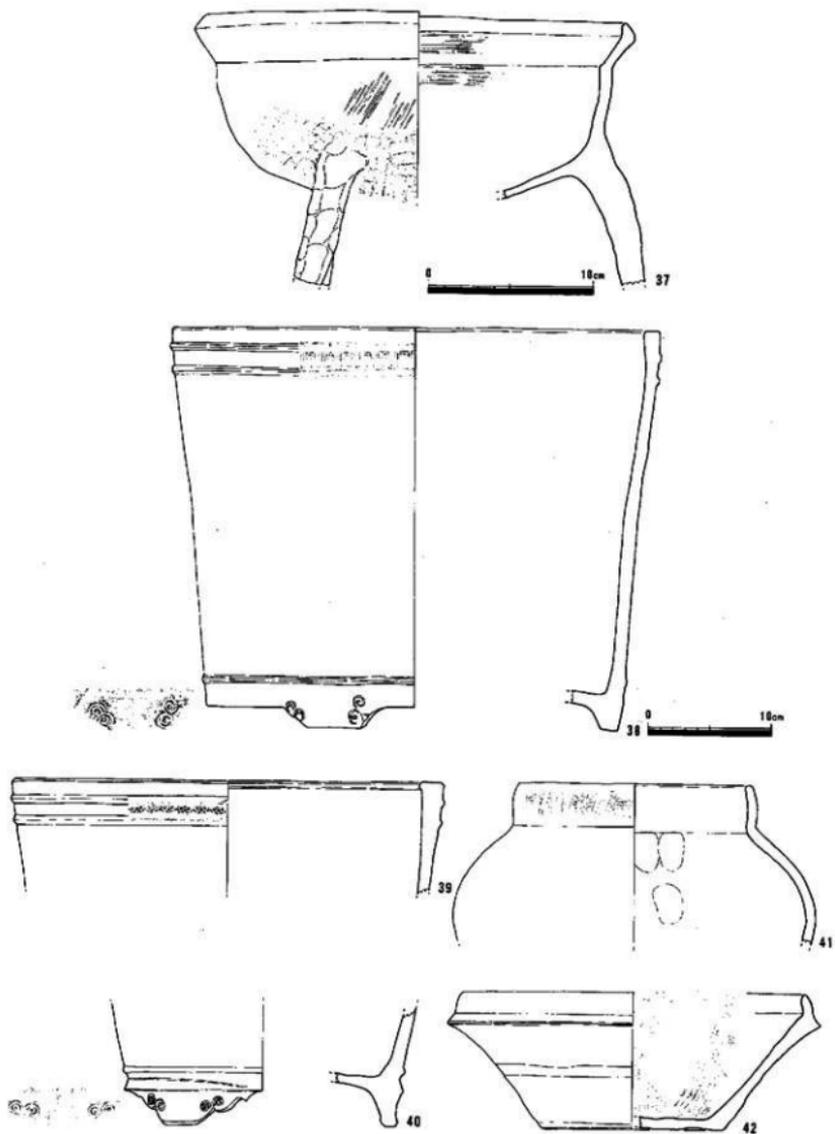
出土遺物(第11図20~22) 20は底面より約20cmで出土した龍泉瀛承の青磁碗である。淡緑色の施釉が施されるが、高台受付部および高台内は一部を除いて露胎となる。内面には片彫りの草花文を有する。21・22は上層の礫層中より出土したもので、21は瓦質の足鍋である。復元口径24.0cmを測り、内面は横方向の刷毛目、外面の体部下半には格子目の叩き、上位は指オサエをし、ヨコナデで仕上げる。22は砂岩製の砥石で使用により窪む。他に土師質土器、弥生時代中期の甕片片が出土している。

##### 5) 溝

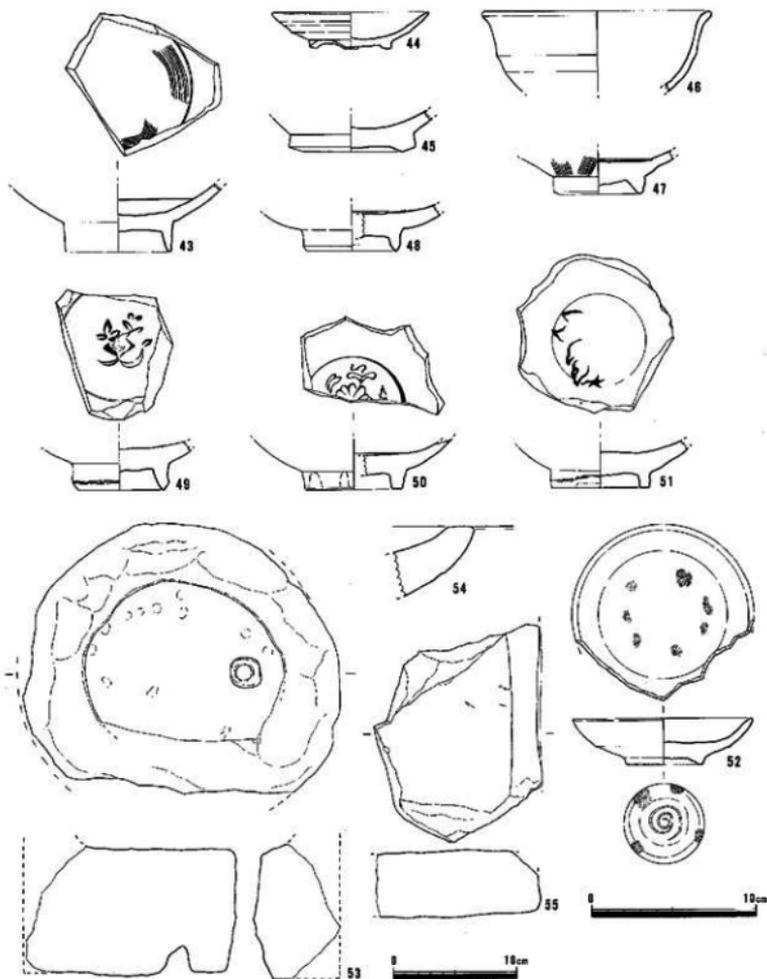
**SD003(第16図)** 調査区の中央西寄りを南北方向に横断する。幅5.5~8.5m、深さは南端で約1m、



第13图 SD003出土物実写図(1) (29~35は1/4、他は1/3)

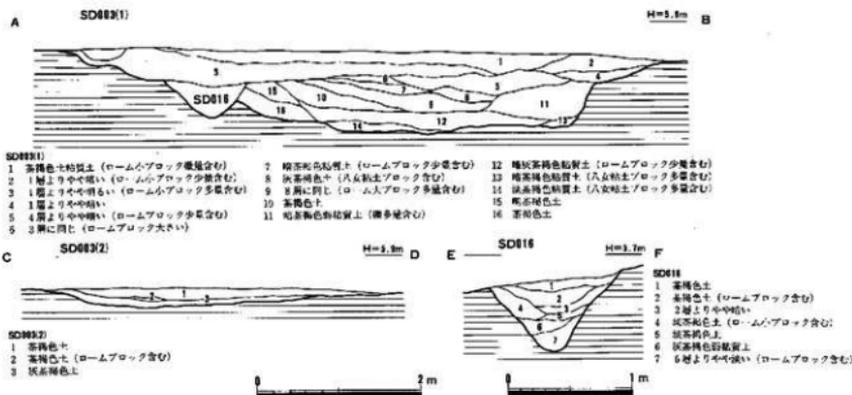


第14図 SD003出土遺物実測図(2) (37・41は1/3、他は1/4)



第15図 SD003出土遺物実測図(3) (53・55は1/4、他は1/3)

北端で0.45mを測り、南側へ緩い傾斜を有する。溝の両側には犬走り状のテラスを数段有する。底面付近の壁面は凹凸があるが、断面は逆梯形を呈する。西側の中位覆土である11層中には拳大からやや大振の膠が第4区網かけ部に示す範囲に投棄されていた。この11層とほぼ同一レベルの東側15層から後述するSD016が切り込む。また、北端部では西側にほぼ直角に折れる様に長さ約5m、幅4.5m、中央

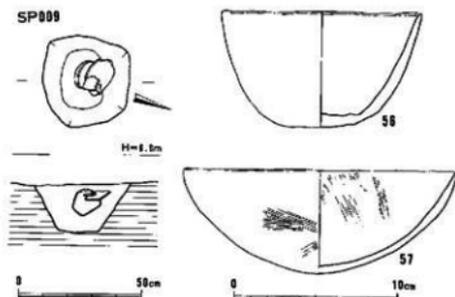


第16図 SD003・016実測図(SD016は1/40、他は1/60)

部での深さ20cmの張り出しを確認した。横断面は浅皿状を呈する。なお、土層図から15・16層を切つて溝の掘り直しが行なわれていることが看取される。溝の下層は八咫粘土層まで掘込まれる。

出土遺物(第13図～第15図)中世後半期の土師質土器、瓦質土器、陶磁器が主体で出土したが、弥生時代前期末～中期の甕椀片の混入が目立つ。23～28は土師器で、23・24は小皿、25～28は坏である。いずれも回転糸切り底である。23は歪みが著しく、11縁部内面には輪状に炭素が吸着する。29～31は土師質の鍋である。29は復元口径37.0cm、器高20.4cmを測り、丸味のある底部と外湾気味の口縁部を有する。内外面に刷毛目調整を施し、外面ではナデ消す。30も同様の器形であるが、復元口径28.6cmとやや小型である。外面全体に煤が付着する。31は口縁部の外湾の度合いが極めて緩く、煤は口縁部下に付着する。復元口径は36.0cmを測る。32～34は土師質の播磨である。32・33には片目が遺存する。32は復元口径28.8cm、器高12.9cmを測り、口縁部の内面は鈍く突出する。6条の播目を有する。33・34の口唇部はヨコナデにより緩く窪む。33は復元口径30.8cm、器高11.7cmで、内面の播目、刷毛目調整は磨滅によりやや不鮮明である。34は4条の播目を有し、内面には粗い斜方向の刷毛目が残る。外面は指オサエによる器面の凹凸が認められる。復元口径28.6cm、器高14.4cmである。35は土師質の茶釜である。丸味のある体部の肩に耳を1対有し、直立するスタンプ文施文の口縁部が付く。耳から下位には煤の付着が認められる。36は土師質のかえりを有する蓋で、丁寧にナデで仕上げられる。37～41は瓦質土器である。37は足鍋で、復元口径25.4cmを測る。口縁部内外はヨコナデ、外面体部の上半は刷毛目、下半には格子目の叩きを施し、内面は刷毛目で、下位はナデ消す。支脚は指オサエで整形する。口縁部下には煤が付着する。38～40は火舎である。38は復元口径39.4cm、器高32.8cmを測り、台形状の脚には渦文のスタンプが施文される。口縁部下に2条、底部に1条の断面菱形の突帯を貼り付け、口縁下の突帯間には雷文をスタンプする。外面は丁寧に研磨、内面はナデ調整を施す。39は38と同様の突帯間に梅花文をスタンプし、口縁部内面は鈍く突出する。復元口径は34.6cmを測る。40は台形状の脚に波状の装飾を施し、渦文のスタンプを有する。脚と底部の境界部分には突帯を貼り付ける。41は茶釜で、ナデ肩の体部に外湾気味の直立する口縁部を有し、菊花文がスタンプされる。内面

には指オサエが残る。42は備前焼の播鉢で、8条の播目を有する。43～45は白磁で、43・45は碗、44は挟入りの高台を有する皿である。46～51は青磁碗で、49～51の内底部には花文を有する。52は李朝青磁皿で全面に灰緑色の釉が施釉される。畳付き部、内底部には目跡が残る。53は砂岩製挽白の上白で、円形のこぼれ目と軸孔を有する。周縁部は火はなし、裏面には火受けの痕跡がある。54は茶白下白の皿部片である。55は置磁石で、一部が火受けにより黒変する。



第17図 SP009実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3)

**SD016**(第16図) SD003を切る南北方向の溝で、前述した様にSD003の埋没途中に掘削される。北側は調査区外に延伸し、南側は北端より約11mで途切れる。幅0.8～1.3m、深さ30～60cmを測り、南側に緩く傾斜する。断面は端部を除いて緩い「V」字形を呈する。出土遺物には土師質・瓦質土器、青磁等の細片が少量ある。

#### 6) ピット

**SP009**(第17図) SB051の南西に位置する。深さ20cm、径35cmの不整形プランの掘り込みの上位に土師器を確認した。

出土遺物(第17図56・57) 56は口縁端部を僅か欠失するが、ほぼ完形に近い鉢で、口径12.0cm、器高7.1cmを測る。やや不安定な平底の底部から外方に直線的な体部が付く。外面は粗いナデ、内面は板状工具による擦過を施す。外面の1/2弱には黒斑が認められる。57は碗で、内外面に刷毛目が観察できるが、磨滅がすすむ。復元口径16.4cm、器高6.4cmで、約1/3が遺存する。他に甕片が出土している。

### 3. 小 結

今回の調査で確認された遺構は弥生時代、古墳時代、中世の3時期に大きく区分される。まず、弥生時代に該当する遺構としてはSC010およびST001が挙げられる。SC010は出土遺物が希少であるが、周辺調査区で検出されている貯蔵穴の時期から類推して前期の所産と考えられる。ST001は器形から中期後半の甕棺で、本支丘の北側に築かれる甕棺墓地の検出例では南端に該当する。なお、本文中でも述べたようにSD003をはじめとする中世の遺構覆土中には甕棺片が含まれており、該期には相当量に墓地を破壊して遺構が掘削されている。古墳時代に相当する遺構にはSC011・012、SB051、SK002、SP009がある。竪穴住居は支丘東側斜面に弥生時代終末から6世紀代に造営される集落の一端で、SC011は5世紀代、SC012は終末から初頭にかかる時期の所産であろう。SB051は覆土から時期を類推したもので、小規模な倉庫としての用途が考えられる。中世の遺構には上述以外の遺構が該当し、大半が後半期の15～16世紀に位置づけられる。SD003は濠状を呈する大規模な溝で、断続するものの、北側の延長上に位置し、同規模を呈する第64次1号溝・第177次SD007との関連性を伺わせる。また、大内系の遺物(12・13・14・21・37)が散見されることから、掘立柱建物を含め、概要に述べた大内氏都代の屋敷地を構成する遺構群の可能性が高い。

## IV. 第177次調査の記録

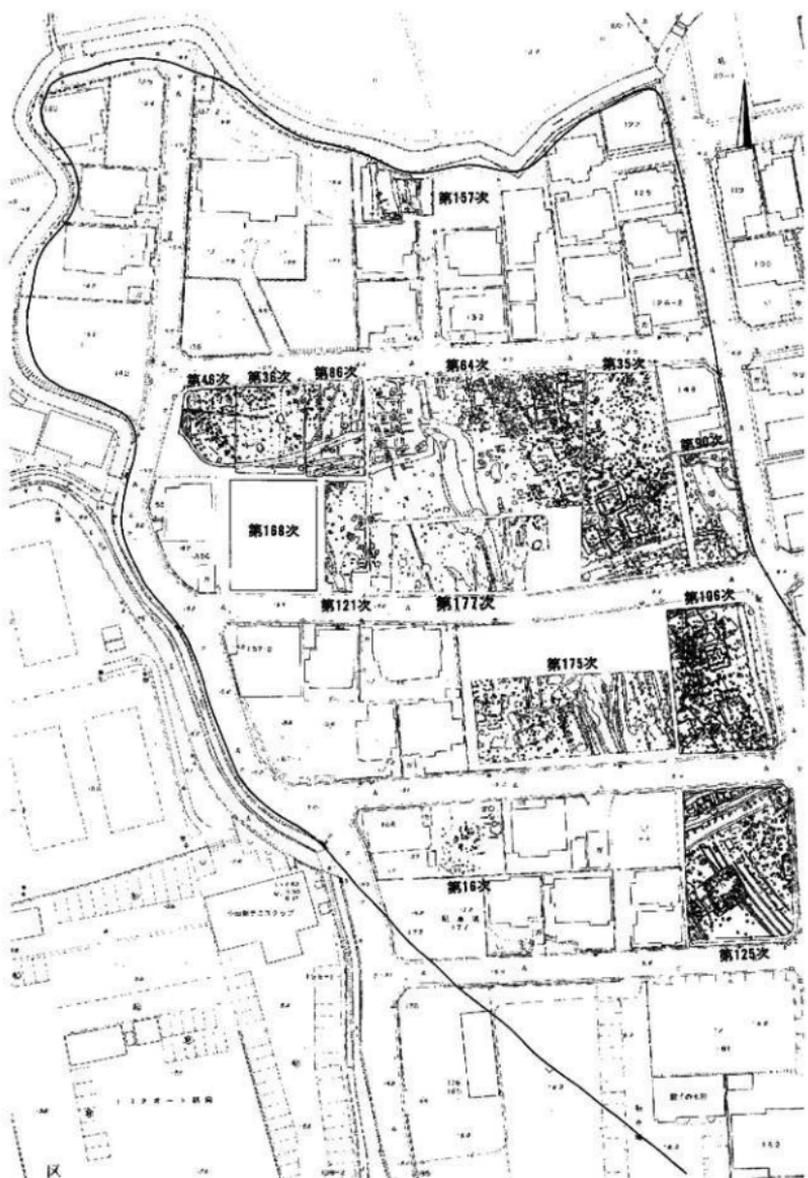
### 1. 調査概要

第177次調査区は早良区小田部5丁目150-3番地に所在し、現況は平地の宅地である。前述した第175次調査と同一の標高5~7mを測る舌状の支丘上に位置しており、第175次調査区の北側の道路を挟んだ北西に位置する。本調査区は第19図の土層図に示すようにように遺構面は西側から東側に緩い傾斜を有しており、該地は支丘尾根筋から東側緩斜面に立地するものと考えられる。第175次調査区との立地とを勘案すると調査区の南側中央部から北西方向に尾根線が縦走しており、支丘の派生方向に合致する。本調査区は以上の立地状況より削平を著しく受けており、遺構の遺存状況は悪い。なお、遺構面の標高は5.5~6.3mを測る。

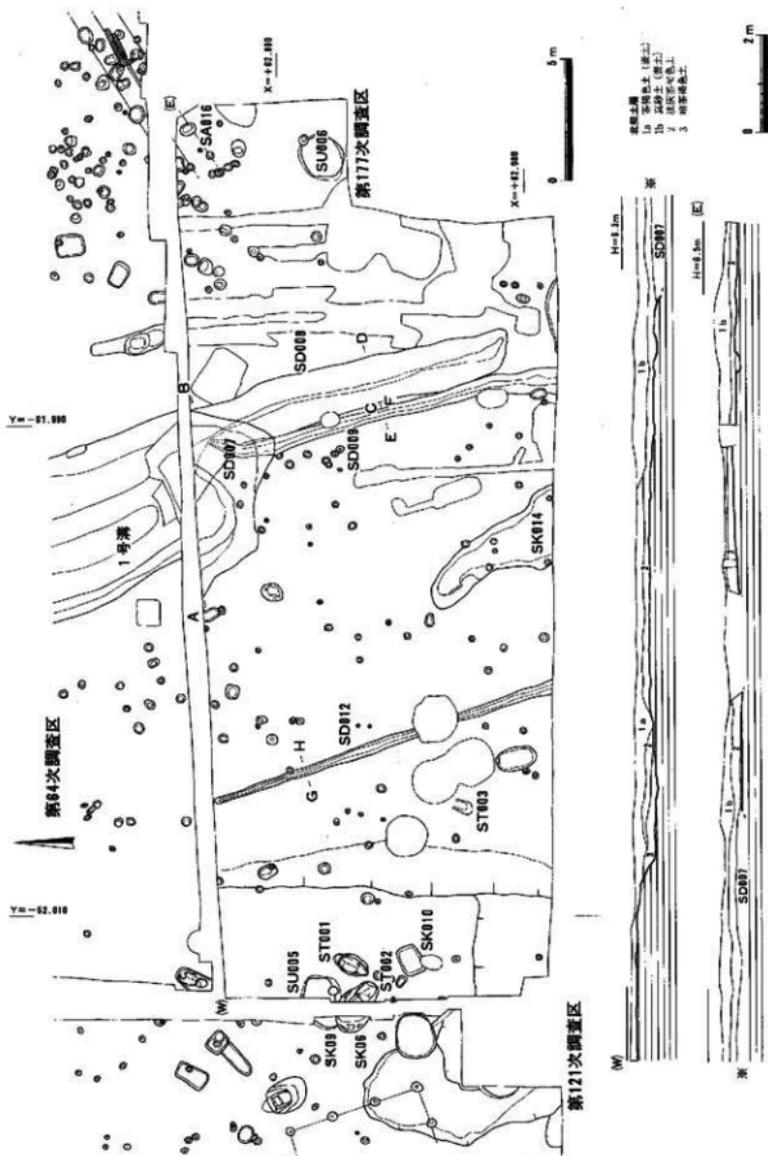
本調査区の遺構は表土下約10~40cmの黄褐色烏柄杓~ム層の上面で検出した。緩斜面上には包含層は認められなかった。今回確認した遺構は弥生時代の甕棺墓・貯蔵穴、古墳時代後期と考えられる櫛列、中世の土坑・溝等である。なお、甕棺墓からは副葬品として前漢鏡、小銅鏡が各1面出土した。調査区は立地状況に加え、表土直下に遺構面が存在していることから、宅地時の擾乱が著しい。

第18図に示すように本調査区を含む街区一帯および周辺では既往に調査が多数実施されている。前章で述べた内容と一部重複するが、本報告の記述をする前に、今回の調査成果を主眼において周辺調査成果について述べておく。弥生時代では前期の貯蔵穴が隣接する第35次・64次・121次調査区および南側に位置する第16次・125次調査区で確認されている。これらと同時期と考えられる川形竪穴住居も上記以外に第175次調査区でも検出されている。また、前期末から後期初頭にかけては甕棺墓が第64次調査区を主体に第36次・86次・121次・175次調査区で確認されており、検出基数は当支丘上で44基である。なお、中世の遺構からも甕棺片が多数出土しており、実際は更に数1基が存在したことが推測される。終末から古墳時代にかけては東側緩斜面に立地する第35次・64次・106次・125次・175次調査区等において竪穴住居60軒を主体とする集落が連続と運営される。後期には第64次調査区で3×4間の総柱建物2棟およびそれらを囲繞すると考えられる3本柱の櫛列が第35次・36次・86次・121次で確認されている。その櫛の規模は東西約49m、南北52mを測り、南北の主軸方位は当支丘の派生方向と同一方向である。また、第46次調査区では、この櫛列と約12mの間隔を有する同様の3本柱の櫛列が並走する。その後中世に至るまで明確な生活の痕跡は看取されず、中世後半期になって多数の溝状遺構が各調査区において確認されている。古文書に換ると大内氏の早良郡代であった大村興景の知行地である「下中國屋敷」や「中國名」が存在したことが知られている。該地周辺は「中國」という字名を残していることから、これらの溝が関連施設の一翼であったことが推察されるが、建物構成等は不明な点が多い。

今回の調査は1994年6月20日に重機による表土剥ぎから開始した。翌日から遺構検出を開始し、並行して調査区内の国土座標を用いたトラバースの設定を実施した。遺構番号は3桁の通し番号を用い、001から遺構の種別にかかわらず付した。よって一部番号に欠番はあるが、重複番号はない。以下の報告にあたっては原則的に調査時の遺構番号を活かし、例言に記した遺構略号を組み合わせて記述していく。なお、銅鏡の出土に際しては、現地において山口大学教授 近藤齋一先生、福岡大学教授 小田富上雄先生の有益な御教示を頂いた。記して感謝致します。調査は遺構実測終了後の同年7月29日に重機による埋め戻し、器材撤収を行い終了した。調査は開発面積760㎡のうち、建物部分を対象として実施し、発掘調査面積は480㎡である。



第18图 第177次調査区位置图(1/1,000)



第19図 第177次調査区遺構配置図(1/200)および北壁土層図(1/100)

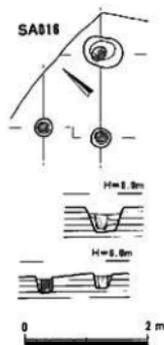
## 2. 遺構と遺物

### 1) 櫛列

SA016(第20図) 調査区の北東端で検出した。調査着手時から、前述した第64次・121次調査区からの3本柱の櫛列の延長が予測されたため精査に努めたが、削平により今回確認できたのは第64次調査区から延伸すると考えられる僅か1間分のうちの2列にとどまっております。櫛列の可能性を有する遺構としておきたい。なお、この2列は図上では中柱および外側の柱に該当する。柱穴は東側が楕円形、西側は円形を呈し、径30~60cm、深さ25~40cmを測る。いずれにおいても径20cm前後の柱底が確認できた。1間の柱間は1.4m、列間の柱間は0.9mを測る。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、出土遺物は土師器、須恵器の細片が少量である。

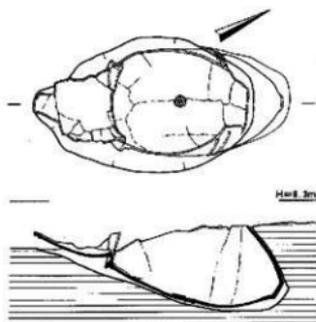
### 2) 甕棺墓

ST001(第21図) 尾根筋に該当すると考えられる調査区の北西際を表土下10数cmで検出した呑口式の甕棺墓である。上甕・下甕ともに甕を用いるが、上半部の削平により上甕は胴部突帯下を欠失する。主軸方位をS-27°-Wにとり、埋蓋角度は25°を測る。墓壇の整坑は削平され、北東方向に掘削された斜坑のみが遺存しており、下甕は密着して挿入される。下甕棺内のほぼ中央部、胴部突帯の上位に該当する位置に完形の前漢鏡1面が鏡背を上面にし、棺にはほぼ密着して副葬されていた。棺内面は鏡を中心として同心円状に径約20cmが器面より淡く変色する。墓壇内の覆土は暗褐色粘質土にロームブロックが混じる。

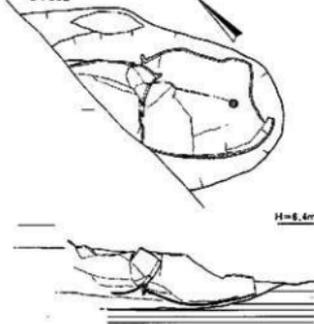


第20図 SA016実測図(1/80)

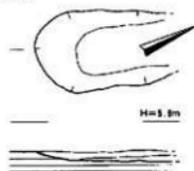
ST001



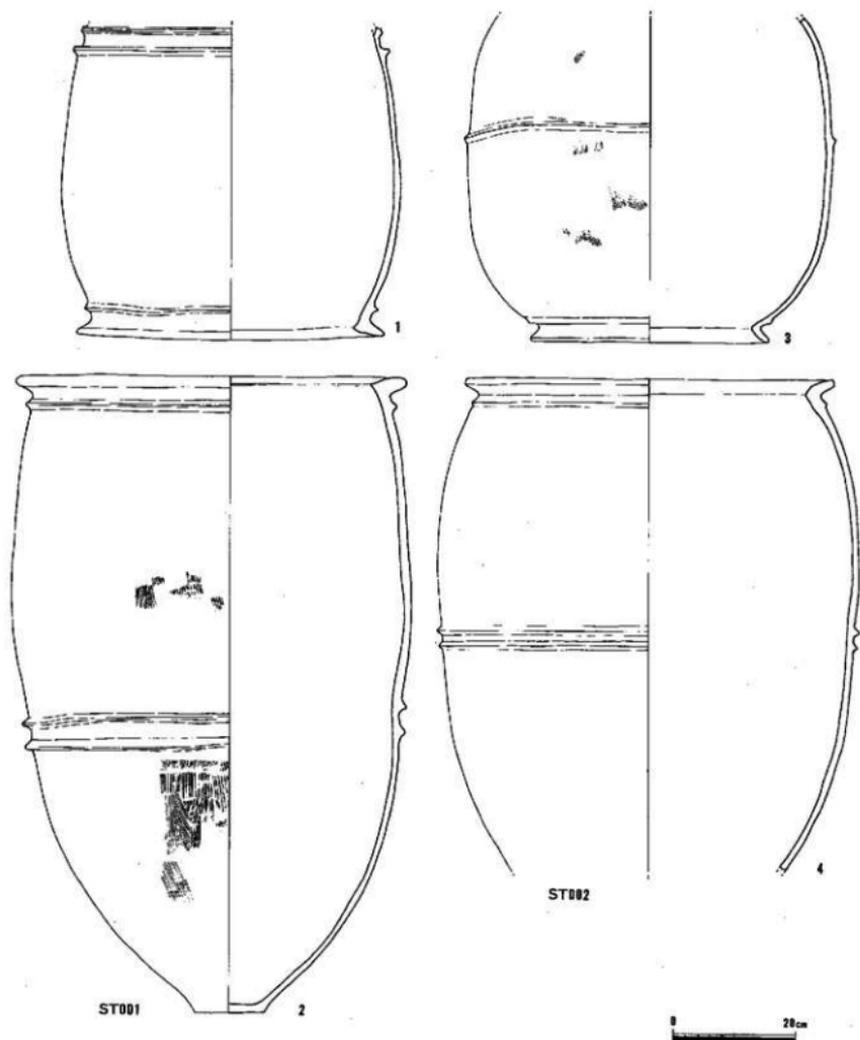
ST002



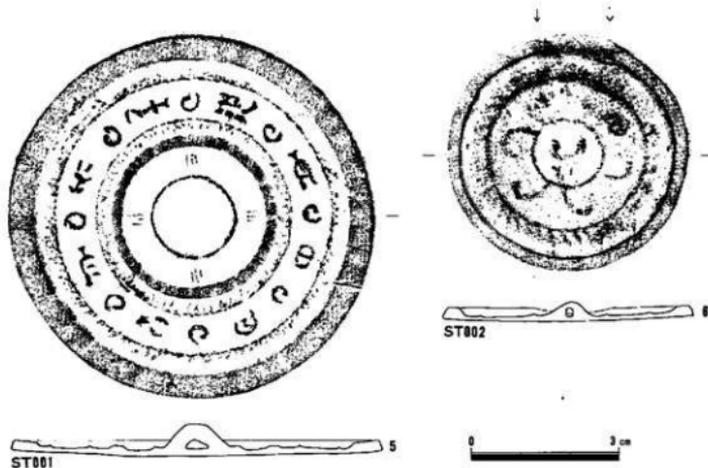
ST003



第21図 ST001・002・003実測図(1/30)



第22图 ST001·002出土遗物实测图(1) (1/8)



第23図 ST001-002出土遺物実測図(2)(1/1)

なお、棺内には暗褐色の強粘質土が堆積しており、採取および洗浄を実施したが、他に出土遺物は無かった。

出土遺物(第22図1・2、第23図5)1は上甕で、復元口径50.0cm、残存器高51.4cmを測る甕である。胴部の下半は欠失する。胴部最大径は上半にあって55.2cmを測り、そこから口縁部にむかってすばまる。口縁部は内傾した逆「L」字状を呈し、内唇部は突出気味にやや張り出す。外唇部は丸味をもっておさめる。口縁下に1条の断面三角形、胴部中位下には2条の断面台形状の突帯を巡らせる。胴部下方の突帯上面はヨコナデにより緩く窪む。器面の剥落が著しく、調整は胴部突帯にヨコナデが観察できるが、他は不明である。色調は内外面ともに黄灰色で、内面には鉄分の沈着が著しい。外面の胴部上半から胴部突帯にかけて黒斑が認められる。胎土には2~4mmの砂粒が含まれる。

2は下甕で、復元口径63.2cm、器高104.0cm、底径11.3cmを測る大形の甕である。胴部最大径を中位より上に有し、65.0cmを測る。長胴の砲弾形を呈する胴部は口縁下ですばまる。口縁部は内傾した逆「L」字状を呈し、内唇部は部分的に突出する。外唇部は肥厚し、丸味を有する。断面台形状の突帯が口縁下に1条、胴部中位下に2条巡り、胴部突帯の貼り付け部は器面が内湾する。外面の調整は器面の剥落がすみ、部分的にしか観察できないが、胴部は縦あるいは斜方向の刷毛目、胴部突帯下にはヨコナデが認められる。内面はナデを施し、胴部突帯に該当する部分ではナデつけが残る。また、中位には一部木口痕が認められる。色調は外面が淡黄褐色、内面は淡黄灰色を呈し、胴部外面の上半には黒斑を有する。なお、器面の一部に鉄分が沈着する。胎土には2~3mmの砂粒が多量に混じる。

5は副葬品である完形の前漢鏡である。鏡式は異体字銘帯鏡(半圓銘帯鏡)に分類され、面径7.55cm、重量57.80gを測る。鈕は半球状を呈するが、頂部は研磨により凸気味な平坦面を有し、鈕高は0.6cmである。なお、鈕の下端半周にはひびが入る。円鈕座には3条一組の放射文を四方に配している。鈕座の周囲を上端幅0.25cmの平頂素圈帯が囲み、その外側には斜行歯文、突線を巡らせる。その外区には銘帯を有し、「内日月心忽而不泯」が篆書体で陽鏤される。なお、字間には渦文が配さ

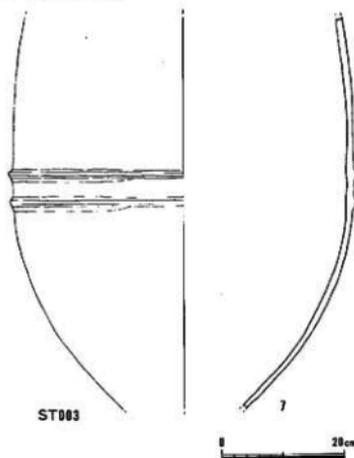
れる。更に外側には突線、斜行櫛歯文を巡らせるが、突線は内区のそれに比して一部鈍く、やや幅広の箇所が認められる。また、櫛歯文も不鮮明な部分があり、漏回りの悪さに起因するものと思われる。縁は上端幅0.5cmの平素縁を有し、0.1cmの反りをもつ。側縁には研磨が施される。銅質は良好で、鏡面には光沢が残る。

ST002(第21図) ST001の西約0.5m、表土下約10cmで検出した。西側は調査区外に位置するが、西接する第121次調査区で確認されたSK06はST002の墓壙の一部と考えられる。表土直下に遺構面が存在していることから、削平および家屋解体時の攪乱を著しく受け、遺存状態は悪く、下甕の胴部下位は欠失する。また、上甕の下位は隣地のブロック塀下にあり、取り上げは不可能であった。上述したSK06からは甕棺は出土していないことから第121次調査区際とブロック塀間に底部が遺存するものと思われる。上甕・下甕ともに甕を用いる呑口式で、主軸方位をN-45°-Sにとり、ST001と直交に近い。現況から推定した埋置角度は約3°で、ほぼ水平である。下甕棺内の胴部突帯の下位に該当するほぼ中央部には完形の小銅鏡1面が鏡背を上面にして、棺にほぼ密着した状態で副葬されていた。墓壙内の覆土はST001同様の暗褐色粘質土で、多量のロームブロックが混じる。棺内には暗褐色強粘質土が堆積しており、採取および洗浄を実施したが、ST001と同じく他の副葬遺物は確認されなかった。ただ、棺内土中には甕棺片が落ち込んでおり、上下不明で取り上げ復元を行なった結果、大半が上甕と接合ができた。出土状況からも看取される様に土圧により上甕がずれ込み、破損したものと推測される。

出土遺物(第22図3・4、第23図6) 3は上甕で、口径38.2cm、残存する器高は53.4cmを測る甕である。胴部最大径位置には断面三角形の1条の突帯が巡り、60.6cmを測る。胴部は樽形を呈し、底部および口縁部下で強くすばまる器形で、肩が張る。口縁部は短い「く」字状を呈し、端部は鈍く面取りする。内外面の稜は緩く、口縁下には断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部の突帯には歪みが認められる。内外面ともに器面の剥落が著しく、胴部外面に刷毛目、胴部突帯の上下にヨコナデが一部残る程度である。色調は外面が淡黄褐色、内面は暗黄褐色で、鉄分が沈着する。外面の胴部突帯下および胴部上半には黒斑が認められる。胎土には2~4mmの砂粒を含む。

4は下甕で、復元口径59.4cm、残存器高80.6cmを測る甕である。胴部最大径を胴部上半に有し、68.6cmを測る。卵形の胴部を呈し、口縁部下ですばまる。口縁部は強く内傾した逆「L」字状で、端部には面取りが施される。口縁下には断面三角形の低い突帯を1条巡らせる。また、胴部最大径位置の下位にはシャープな断面三角形の突帯が2条貼付される。器面は大半が剥落し、胎土中の砂粒が表出するため、調整は胴部突帯の上下に認められる黒斑部分においてヨコナデが観察できる程度である。色調は外面が淡黄褐色、内面が暗黄褐色を呈し、鉄分の沈着が認められる。胎土中には2~3mmの砂粒が多量に混じる。

6は副葬品である完形の銅鏡で、面径5.1cm、重量16.00gを測る。鈕はやや不整な半球状を呈し、径0.95cm、高さ0.4cmを測る。鈕座は径1.5cmで、鈍い突線が巡る。その外側は図文帯となる。

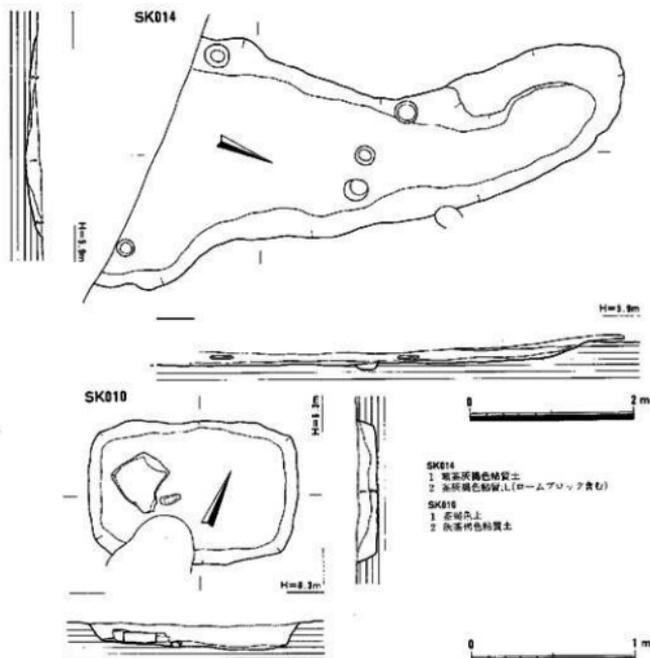


第24図 ST003出土遺物実測図(1/8)

鋸座から対で派生する蕨手状文が3対配される。図上で左上および左下は蕨手を外向させ対となるが、右側では不鮮明ながら内向きの対となり、一方（下側）は巻きが殆ど認められず、弧文と表現する方が相応しい。図文帯の外側は鈍い突線で画された斜行櫛歯文帯となり、右から左へ緩れ気味の粗い櫛歯が施される。縁は断面台形状を呈する平素縁で、上端幅0.3cm、高さ0.25cmを割り、0.1cmの反りを有する。上面および縁側は丁寧に研磨が施される。なお、図上の↓は幅1.4cmにわたり縁が高さ0.15cmと周囲から窪んでおり、鑄型の湯口に相当する箇所と考えられる。鏡背の湯口周辺部は突線も含め、文様全ての鑄上がりが悪く、不鮮明となっている。鋼質は比較的良好である。

ST003(第21図) 重機による表土剥ぎ取り中に調査区の南西において甕棺が出土し、周囲を精査した結果、墓墳と考えられる深さ5cm程度の浅い掘り込みを確認した。著しい削平により規模、甕棺出土状況等は不明である。

出土遺物(第24図7) 墓墳周辺で採集した遺物を復元したもので、口縁部、底部を欠失し、胴部径の約1/3が遺存する。胴部最大径は55.3cmを割り、その位置には断面台形状の突帯は2条貼り付けられる。胴部は口縁部に向かって緩くすぼまる。器面の剥落により調整は突帯部におけるヨコナデが僅かに観察できる程度である。色調は外面が淡黄褐色、内面は暗黄褐色で、外面の胴部中位には黒斑が認められる。胎土には2~4mmの砂粒が混じる。



第25図 SK010-014実測図(SK010は1/30、SK014は1/60)

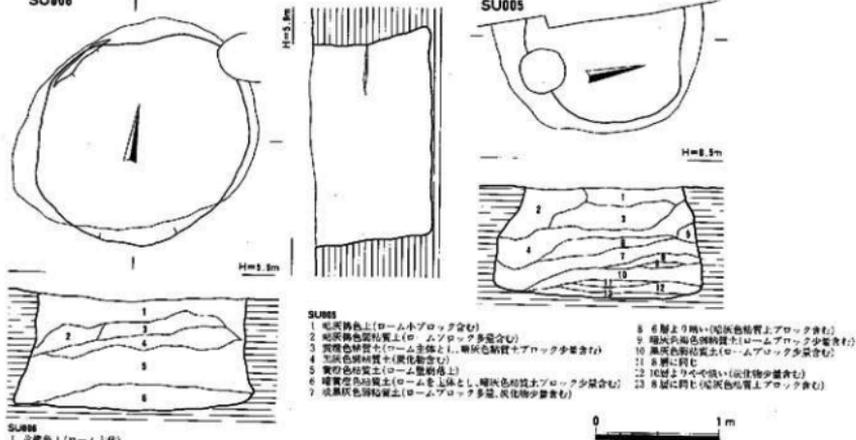
### 3) 土坑

**SK010**(第25図) ST001の南側で検出した隅丸長方形を呈する土坑で、長さ1.3m、幅0.9m、深さ15cmを測る。断面は逆梯形を呈する。底面は東側に緩く傾斜し、西側には扁平な磔が置かれる。出土遺物には弥生土器と思われる少量の細片のみである。

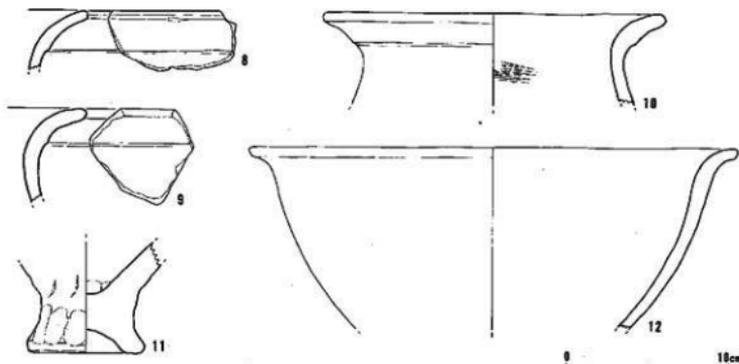
**SK014**(第25図) 調査区中央の南端部で検出した。南側は調査区外に延びており、全容は不明であるが、溝状の土坑と思われる。南端で幅3.3m、深さ10cmを測り、壁面の立ち上がりは緩やかである。出土遺物には土師器、土師質土器の細片がある。

### 4) 貯蔵穴

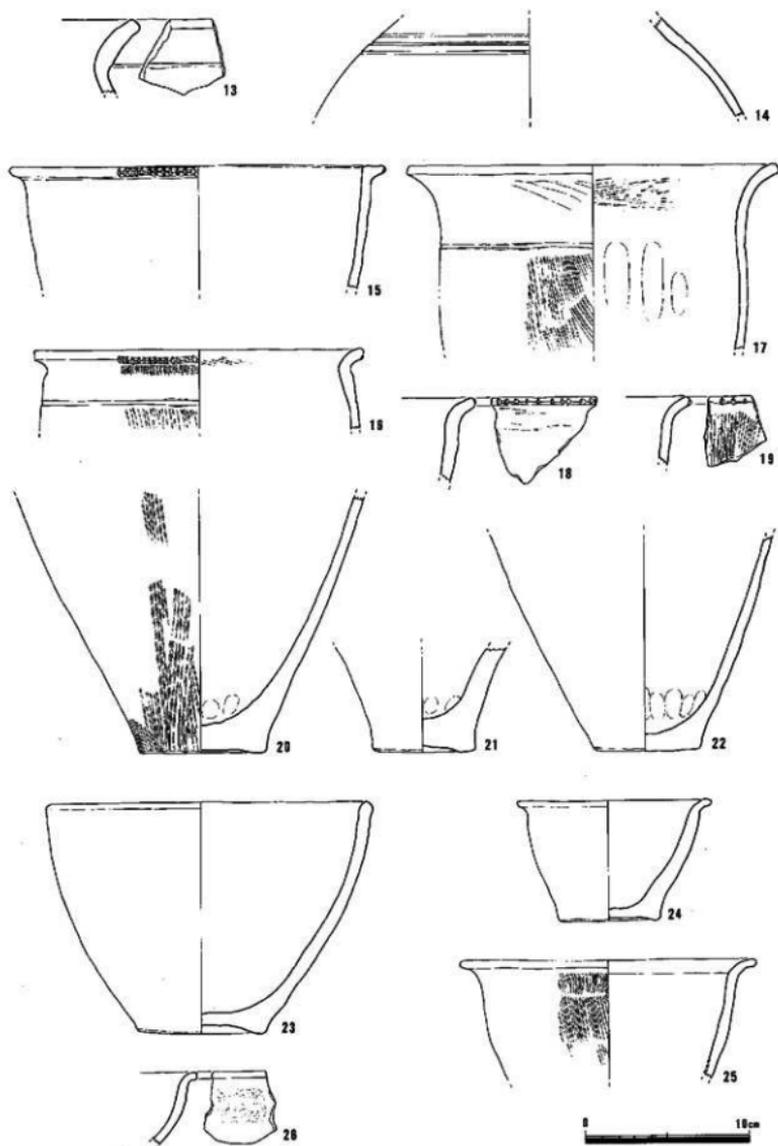
**SU005**(第26図) ST002の北側に位置する。西側は調査区外に位置するが、隣接する第121次調査区SU006



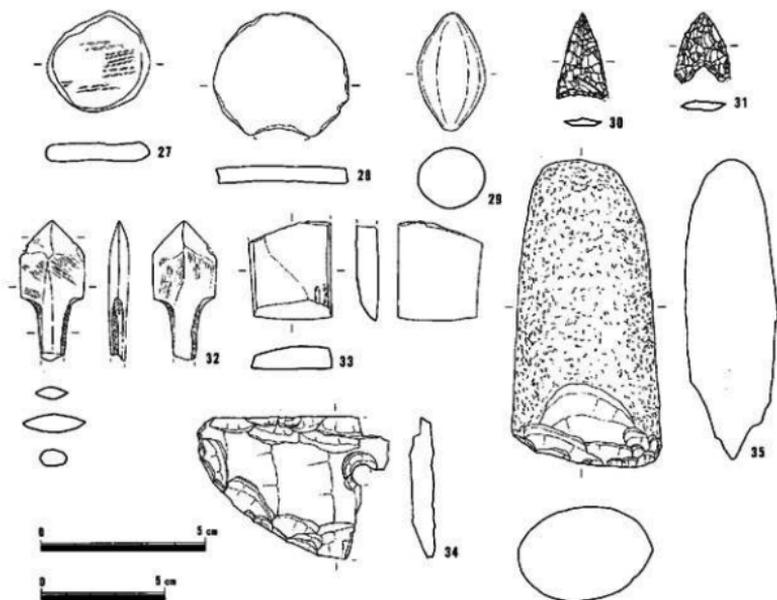
第26図 SU005・006実測図(1/40)



第27図 SU005出土遺物実測図(1/3)



第28図 SU006出土遺物実測図(1) (1/3)



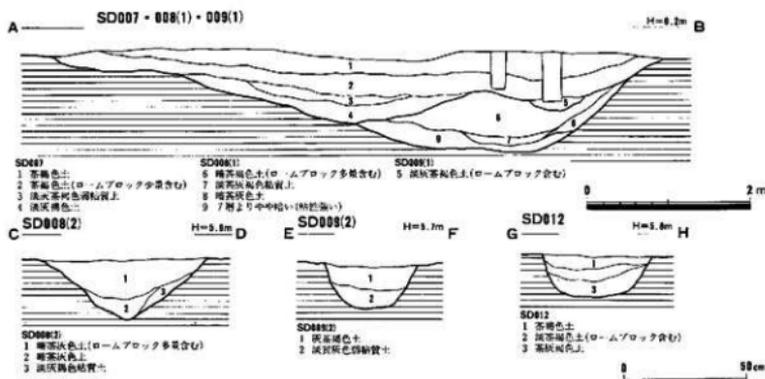
第29図 SU006出土遺物実測図(2) (30~32は2/3、他は1/2)

で確認されているSK09と同遺構と考えられる。なお、同調査区ではST002の墓墳と考えられるSK06を切っている。西調査区の成果から平面プランは楕円形で、長径2.1m、短径1.2mを測る。断面はフラスコ状を呈し、底面は平坦である。深さ0.95mが遺存する。土層の堆積は中層(4~10層)・下層(11~13層)は5層のローム崩落土を除き、北側からの流れ込みを呈し、上層(1~3層)は壁面の崩落土を主体とする。

出土遺物(第27図) 遺物は各層から散漫に出土しており、弥生土器の破片が大半を占める。8~11は壺で、強く外反する口縁部外面に粘土を貼り付け、段を形成する。調整はナデ、ヨコナデを主体とし、10の頸部内面にはヘラ研磨を施す。11は甕の上げ底の底部で、裾が外方に大きく張る。外面は指オサエ、シボリ、内面にはナデを施す。12は復元口径29.4cmを測る鉢で、口縁部を如意形に外反させる。口縁部外面はヨコナデ、他はナデ調整する。8・10は下層、9・11は中層、12は上層出土である。他の出土遺物に黒曜石の剥片がある。

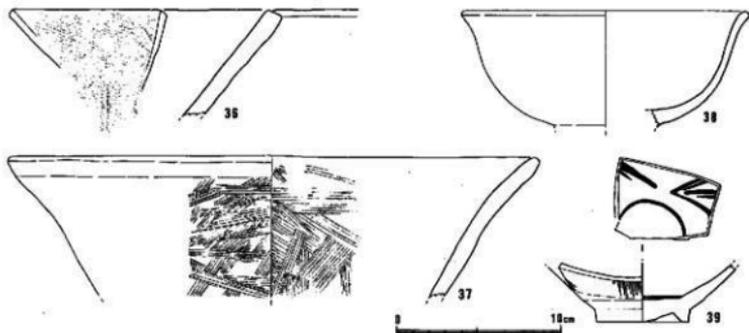
**SU006(第26図)** 調査区の北東際で確認した。やや不整な円形を呈し、径1.5~1.7m、深さ0.95mを測る。断面はフラスコ状をなすが、両側の壁面は直線的に立ち上がる。土層は下層(6層)・中層(4・5層)は凸レンズ状に堆積し、上層(1~3層)はロームを主体とする壁面の崩落土である。

出土遺物(第28・29図) 遺物は中・下層を主体に出土し、弥生土器の破片が多い。13・14は下層出土の壺で、14は肩部にはヘラ掃きの3条の沈線を施し、器面は丁寧にナデる。15~22は甕である。このうち15~19は口縁部を有する資料で、15を除いては如意形を呈する。15の口縁部は突帯を貼付し、

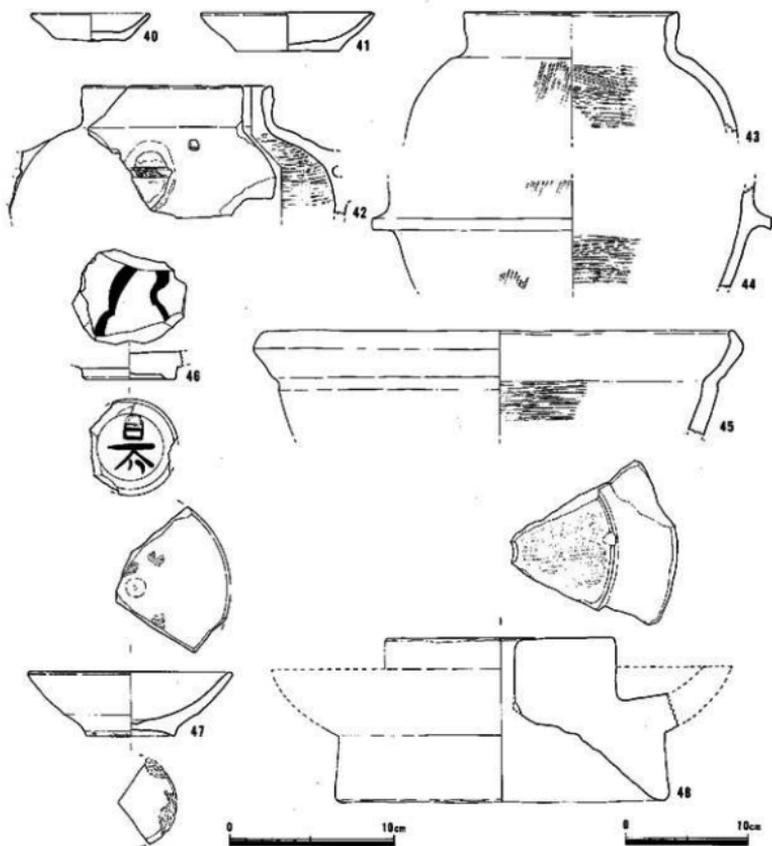


第30図 SD007・008・009・012実測図(SD009(2)・SD012は1/20、他は1/60)

逆「L」字状を早するもので、先端のやや鈍い木口による刻目が突帯全面に施される。突帯の上面は水平であるが、ヨコナデにより中央部が僅かに窪む。16は口縁部下端に木口による浅い刻目を有し、やや張り気味の肩部には浅い沈線が1条巡る。17の口縁部は長く外反し、口縁下には沈線を配する。18の刻目は口縁部全面に浅い押し引きで、19の刻目は口縁部下端にへら状工具による刺突によって施される。15・18・19は下層、その他は中層出土である。20~22は底部で、20・21は僅かに上げ底状となる。外面は刷毛目もしくはナデを施し、内面には指オサエが残る。20は中層、21は下層、22は底面で出土した。23~26は鉢で、23は上げ底状の底部から胴部が外方にやや丸味をもって開き、口縁部は直立気味に立ち上がる。24~26は如意形の口縁部を呈し、26の胴部上半にはへら状工具による無軸の羽状文が施文される。23は底面、24・26は中層、25は下層出土である。27・28は土器片利用の円盤で、甕を用いる。29は土製投弾で、長さ4.8cm、径2.5cm、重量24.5gを測る。丁寧にナデで仕上げる。30・31は黒曜石製の両面加工の石鏃で、30は基部の抉りが浅い。32は粘板岩製の有蓋式磨製石鏃である。



第31図 SD007出土遺物実測図(1/3)



第32図 SD008出土遺物実測図(48は1/4、他は1/3)

身は五角形を呈し、先端を除いて鑄は不明瞭である。基端部は欠失する。33は頁岩製の扁平片刃石斧で、基部を欠損する。厚さ0.9cmを測る。34は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製石包丁の未製品で、両面から調整刻痕を加え、外湾刃を作出する。また、両面からの穿孔を施す。35は玄武岩製蛤刃石斧の再利用品で、折損部に粗い刻痕を加えて刃部を作り出す。重量は476.7gを測る。他に黒曜石の剥片が出土している。なお、下層覆土は採取・洗浄の結果、炭化米・サメ類の歯・タイ類の脊椎骨等が出土した。

##### 5) 溝

SD007(第30図) 調査区の中央北壁際で検出したSD008・009を切る溝で、北側は隣接する第64次調

査区の1号溝に連結し、南側は本調査区内で終結する。第64次調査区では1本の溝で報告されているが、本調査区の検出状況からSD007・008の重複であると判断される。幅7.4m、深さ0.9m、両調査区を合わせて全長約25mを測る。東側には幅1.5mの平坦面を有し、底面は断面皿状する。

出土遺物(第31図) 36・37は土師質土器で、36は播鉢である。外面は磨滅するが、内面には刷毛目を施し、4条の播目をいれる。37は土鍋で、内湾気味の胴部に緩く屈曲する口縁部がつく。内外面を粗く刷毛目調整する。外面口縁部下には煤が付着する。38・39は青磁碗である。38は短く反外する口縁部を有し、くすんだ淡緑色の釉が全面に施軸される。39は同安窯系の碗で、外面には細かい櫛目、体部内面には片彫りで施文し、内底部との境に段状の沈線を施す。淡オリーブ色の釉は体部外面以下を除いて施軸される。他に白磁、瓦、陶器の細片が出土している。また、菱椀片が混入する。

SD008(第30図) SD007・009に切られる溝で、調査区の東側を南北方向にはしる。北側は上述した第64次調査区の1号溝に連結するものと考えられ、同溝西側の2段目の断面「V」字形を呈する掘り込みが延長部分と推察される。途中でやや蛇行しつつ南北端は両調査区で終結しており、全長約35m、幅2.1m、断面「V」字形で、深さ0.75mを測る。なお、溝は北側に向かって緩く傾斜する。覆土中には火受けした拳大の礫が少量投棄されていた。

出土遺物(第32図) 40は土師器小皿で、復元口径7.2cm、器高1.7cmを測る。外底部は回転糸切りである。41は土師器環である。復元口径10.4cm、器高2.3cmで、内外面の磨滅により調整は不明である。42-45は瓦質土器で、42-44は茶釜である。42・43ともに丸味を帯びる体部に直立する口縁部を有し、口縁端部は僅かに内傾する。調整は体部内面を刷毛目、口縁部をヨコナデし、体部外面は刷毛目をナデ消す。42は大半を欠損するものの耳の基部が残し、耳孔には鉄芯が遺存する。また、耳の上位には1辺0.7cmの隅丸正方形を呈する孔が2個認められる。44は体部で、やや垂れ気味の鈎を有する。内面は下半を刷毛目、上半をナデ、外面は鈎部分をヨコナデする。45は足鍋の口縁部で、体部から口縁部には「く」字状に折れ、更に短く内側に折れる短い端部がつく。体部内面は刷毛目、口縁部内外面をヨコナデ調整する。復元口径は28.2cmを測る。46は龍泉窯系の青磁碗で、断面方形の低い高台を有し、内底部に片彫りによる草花文が施される。釉色は淡緑色で、盪付き部および外底部は露胎となる。なお、外底部には釉垂れにより一部不鮮明ながら、「口一介」と読める墨書が書かれる。47は復元口径12.4cm、器高3.9cmを測る李朝青磁の皿で、体部中位で鈍く屈曲する。全面に淡緑灰色の釉が施軸され、盪付き部および内底部には目跡が認められる。48は阿蘇溶結凝灰岩と考えられる茶臼の下臼で、皿の端部を欠失する。器高12.4cm、軸孔は円形を呈すると思われ、復元径2.2cmを測る。その他の出土遺物には白磁、須恵質土器の細片がある。

SD009(第30図) SD008の西側に並行し、SD007に切れ、SD008を切る。幅0.4~1.1m、深さ15~20cmを測る浅い溝で、断面は「U」字形を呈する。北側では東に短く折れる。出土遺物には土師質土器、瓦の細片が少量ある。

SD012(第30図) SD009の西約13mを並走する溝で、北側は調査区際で終結するが、その延長方向には約9mの間隔を有し、第64次調査区では3号溝が検出されている。本調査区では断面「U」字形で、幅30~40cm、深さ15~20cmを測り、南側に緩く傾斜する。出土遺物には土師質土器、白磁の細片が少量ある。

### 3. 小 結

今回の調査で検出した遺構は弥生時代(SU、ST)、古墳時代(SA)、15~16世紀(SD、SK)に時期区分できる。SUは板付Ⅱ式の所産である。SAは6世紀末~7世紀代もしくは奈良時代との類推が過去なされてきているが、第106次調査の確認状況から古墳時代の範疇で現在のところ把握しておきたい。なお、菱椀および副葬遺物については「VI. 結語」でとりまとめ後述する。

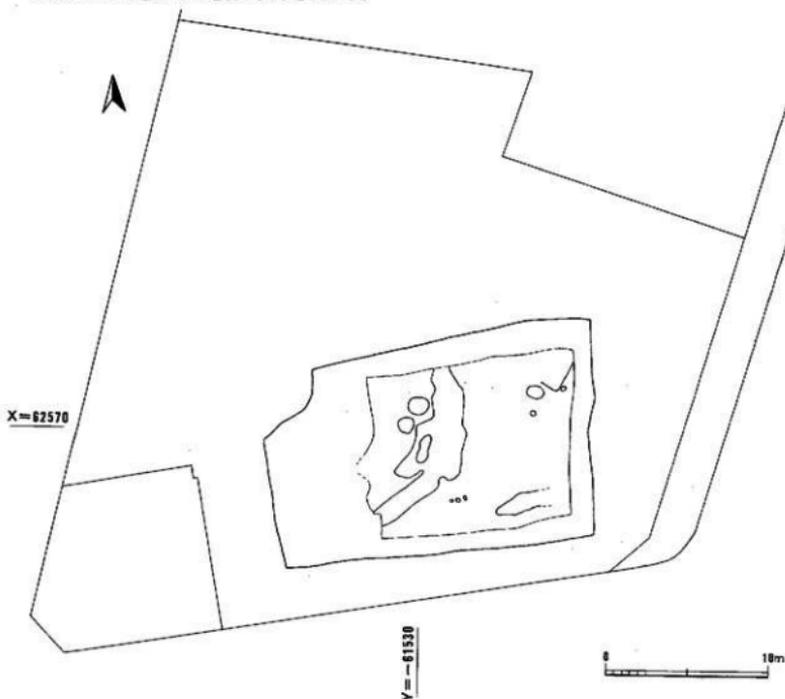
## V. 第179次調査の記録

### 1. 調査概要

有田遺跡179次調査地点は、早良区小田部2丁目102・103-1・103-2・104・105-1にかけて所在する。有田台地のほぼ中央部に位置し、北側へ八手上に大きく広がる舌状台地にはさまれた開析谷の谷頭部分にあたる。旧況では水田として利用され、現況ではさらに水田面から1m以上客土を盛り上げて住宅を建設している。現況では谷部分は完全に埋め立てられ、周辺との高低差はほとんどない。

本次調査地点の周辺では、道路をはさんで南側で第124次調査が、また西側道路をはさんで第164次調査が近接して行われており、第52次・第169次調査も本調査区に近い位置にある。総じて有田遺跡群の中でも最も調査密度の高い地区の1つである。うち第164次調査では道路側溝の可能性のある溝を検出しており、第169次調査ではこれとほぼ対応するとされる溝が検出され、平安時代初めに比定されていることから、奈良～平安時代にかけての官道の存在も考えられている。そのほか、周辺では弥生時代から古墳時代にかけての集落が検出されている。

今回の調査は実施面積120㎡で、その結果上記の溝に関連する可能性のある溝状遺構のほか、竪穴住居址1軒、土坑、ピットなどを検出した。遺物はパンケースで17箱ほどであるが、遺構に伴う遺物は少なく、包含層からの遺物が大半を占める。



第33図 第179次調査区位置図(1/300)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 竪穴住居

SC01(第35図) 調査区北東隅に位置する、方形と考えられる竪穴住居。南北方向に延びる谷の東側斜面部分に作られている。すでに大きく削平されていて、遺構の残りはきわめて悪く、本来の形状、規模などは失われている。検出した時点では東西壁1.28m、南北壁2.2m以上が遺存し、南北方向に調査区外まで及んでいる。遺構の深さは最も残りの良い部分で15cmにすぎず、西側半分が完全に失われている。遺構覆土は黒色粘質土で、灰色シルトがブロックで若干混入する。東西方向の壁を基準にすると住居主軸はN-25°-E。住居床面は比較的平坦で張り床などは検出されていない。この住居にともなう柱穴は検出できなかった。また壁溝などの床面上の構造物も検出されていない。住居南東隅隅に隣接して径40~50cmのピットがあるが、住居に関連するものかどうかは不明である。

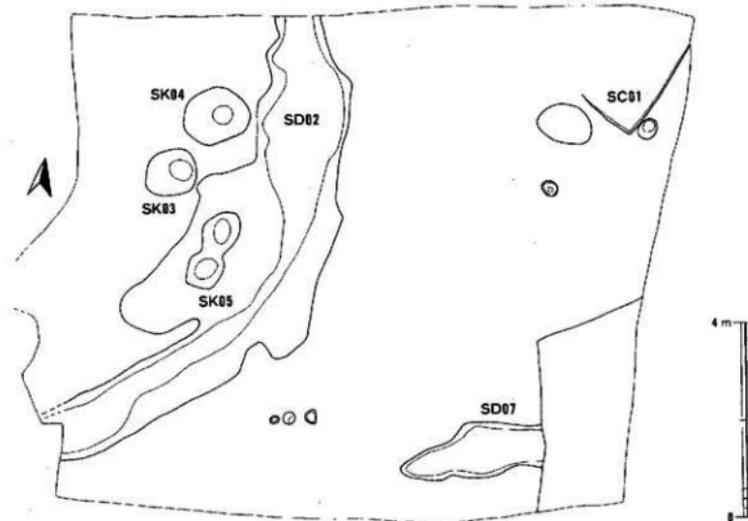
出土遺物(第38図1) 遺構覆土内からは遺物はほとんど出土していない。図示できるものは1点のみである。1は弥生時代中期の甕形土器で、口径22.0cm、残存高5.3cmをはかる。内面、外面ともナデ調整で口縁部はヨコナデ調整。

### 2) 土坑

SK03 調査区西側の谷部分に位置する略円形の比較的浅い土坑で、土坑内は一部基礎杭により破壊される。径0.9m~1.1m、深さ30cmで若干すり鉢状を呈する。覆土は黒色粘質土で、土坑の用途・性格は不明である。

出土遺物 弥生土器が数点出土したが図示可能なものはない。胎土、調整などはSK05の土器に類似する。

SK04(第37図) 調査区北西側の、谷部分に位置する。平面プランは略円形で、やや東西に長い形になる。径1.2~1.32m、深さ1.3mを測る。断面形はすり鉢形で、底部はやや尖る形態である。覆土は黒



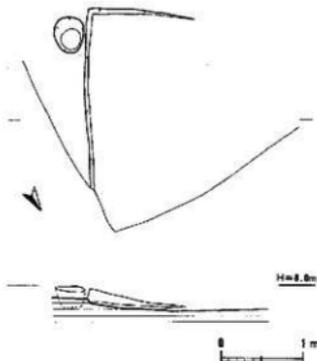
第34図 第179次調査区遺構配置図(1/100)

色粘質土で、地山の灰色シルト土と明確に区別される。土坑内の壁面、床面から大量の漏水があり、土坑の用途として井戸の可能性も考えられるが、土坑の形態から断定はできない。

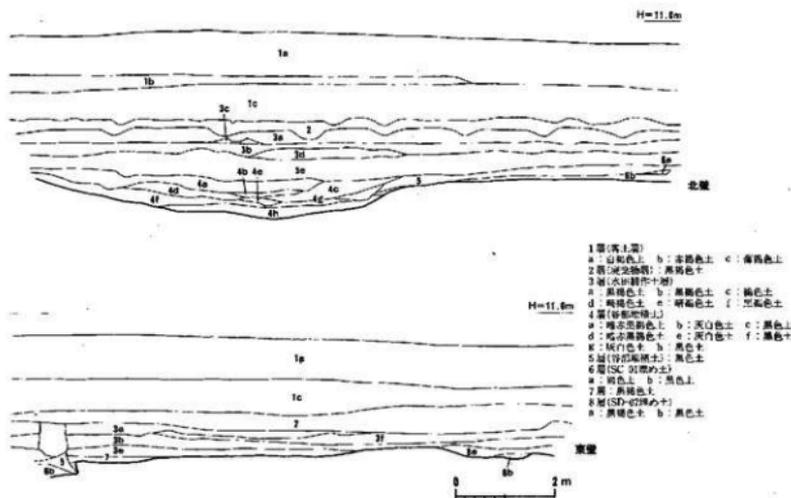
出土遺物(第38図2～6) 遺構覆土から、比較的多量に出土した。遺物の種類は土器、木器である。なお木器は図示可能なものがなく、ここでは個々の報告を見送る。

2は弥生中期の壺形土器の口縁部～頸部で、口径30.6cm、残存高9.0cm。口縁外側が外側に張りだし、内側にも若干突き出す。胎土は砂粒をやや多く含んで粗く、薄淡褐色を呈する。調整は頸部は内外面ともナデ、口縁部はヨコナデ調整。3は2とほぼ同時期の高杯脚部で、残存高16.5cm、脚部最小径4.8cm。脚部は粘土筒を絞り込んで整形しており、内面に絞り込んだ痕跡が見られる。外面は縦方向のミガキ、内面はナデ調整、杯部分内面もナデ。全体に風化が進む。4は土師器甕形土器の口縁部で口径23.2cm、残存高2.4cm、破片下端で胴部への屈曲がわずかに見られる。外面はハケ日後ヨコナデ、内面は横方向ハケ目で口縁端部はヨコナデで丸く仕上げる。5は土師器小型丸底壺の口縁～頸部にかけてで、口径10.6cm、残存高4.5cm。胎土は明薄褐色の細かい粘土で、外面は縦ハケ後ヨコナデ、内面は粗いヨコナデで、口縁端部は丸く仕上げる。6は須恵器高杯脚部で、底径9.4cm、残存高4.4cm。外面から内面方向への穿孔が確認でき、破片上端で上部杯部との接合痕がわずかに見える。外面は上部は横方向カキ目、下部は回転ヨコナデで、内面は回転ヨコナデで調整する。

なお、図示できなかったが、これらの遺物にまじって近世の染付磁器が出土しており、遺構の時期はこの時期によ



第35図 SC01尖刺図(1/60)

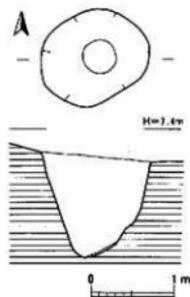


第36図 調査区北壁・東壁土層図(1/100)

るものと考えられる。

SK05 調査区西側の谷部分に位置する瓢形の土坑で、掘り方は各々2つの土坑が対になってつながらる形になる。全長1.7m、幅は70cmで、深さは北側から各々12cm・13cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、壁、床面は地山との境界が明瞭であるが、上端部分がだれた感じになり、ラインがはっきりしないことから、人為的な掘込みではなく、谷部の流路にともなう自然生成の窪みとも考えられる。ここでは一応遺構として扱う。

出土遺物(第38図7・8) 遺構覆土から弥生時代に属する土器が数点出土したが、図示できたのは2点のみである。7は変形土器の口縁部で、口径19.3cm、残存高3.9cmを測る。内外面ともにナデ調整で、口縁部ヨコナデ調整。8は変形土器の底部と考えられる。底部径9.0cm、残存高1.7cmで、胎土は7と類似する。内外面ともナデ調整で、底部はケズリもしくは粗いナデ。



第37図 SK04実測図(1/60)

SK06 調査区南西端に位置する。検出時の深さが3cm前後で遺存状況が悪く、雨天時に調査区が水没した際に遺構の正確な位置、形状が不明となり、詳細な記録は残せなかった。遺構の規模は径1m前後の略円形で、SK04と規模や平面プランが類似している。遺構覆土は黒色粘質土で、炭化物が若干混入する。

出土土器(第38図9) 9は弥生土器で、口径7.2cm、残存高7.7cm、胴部最大径10.0cm、外面に指押さえ痕が多く残り、また口縁部調整も不十分で粘土継ぎ目が残る。内面はナデで仕上げている。全体に器壁の凹凸が目立ち、粗い作りになる。胎土も砂粒を多く含んで粗く、暗薄褐色～暗褐色を呈する。

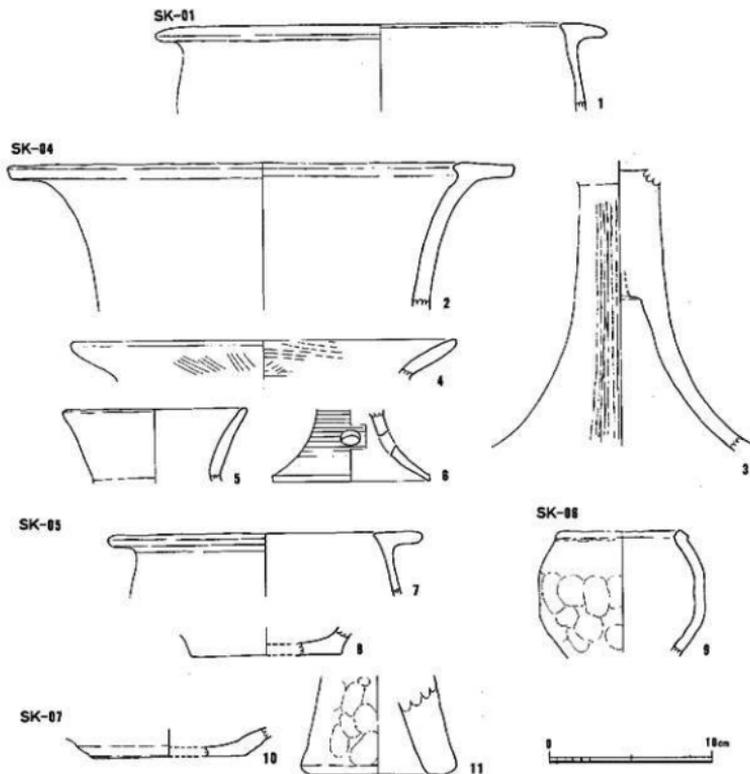
### 3) 溝

SD02 本調査区自体が1つの谷頭部分にあたり、全体が谷落ち地形となっているが、SD02はそのなかで調査区中央に南北に延びる最も低い溝状の部分の指す。遺構として設定した規模は、遺構南側で幅1.2m、深さ20cm、北側で1.9m、深さ10cmとしたが、本来の谷全体を考えるとその規模はさらに大きなものになる。本来は自然流路で、遺構検出後もかなりの量の湧水が遺構内を流れる状況になった。遺構の方向はゆるく湾曲する形で南から北に向かって流れており、全体の地形もこの方向に沿ったものになっている。また谷全体の傾斜は南側できつく、北側でやや緩やかになることから、より北側のほうで谷幅が広がることが考えられる。遺構を含めた谷全体の覆土は黒色粘質土で、大量の遺物を含んでいるが、この遺物については包含層の説明の中で記述する。

SD07 調査区南東側で検出された、東西に走る溝状遺構で、検出段階で全長2.96m、最大幅1.16m、深さ12～14cmを測る。遺構東側はトレンチにより失われているが、調査区東壁土層にSD07の断面形と対応する落ちが認められ、このことからSD07は直線的に調査区外東側へ延びることが想定できる。遺構埋土は黒褐色粘質土で、薄褐色粘質土をブロックで含み、非常に硬質で粘性がある。遺構横断面は逆かまぼこ形で、床面はかなりの凹凸がある。遺構西端は谷部の落ちにより自然に消失する形態になっている。当初から遺構の形状がこのようなものであったか、あるいは谷の開削により遺構が谷に近い部分で削られたのかは不明である。

この遺構は周辺の諸調査区で検出されている、東西方向に走る溝状遺構と平行しており、特に第164次調査区で検出されたSD01の延長線上に位置することから、これらの一連の溝状遺構と一体となることも考えられるが、今回検出されたSD07は、後で述べるようにこれらの遺構に伴うものとは即答し難い。

出土遺物(第38図10・11) 遺構内からは弥生土器・土器を中心としてある程度の量の土器が出土したが、図示可能なものは次の2点のみである。10は須恵器の底部破片で正確な器種は不明。底部径



第38図 竪穴住居・土坑・溝出土遺物実測図(1/3)

9.2cm、残存高1.8cmで、底部は未調整。外面は回転ヘラケズリで、内面はナア及び回転ヨコナア。11は器台脚部で、底部径7.8cm、残存高6.1cm。胎土はやや粗く、薄褐色を呈する。

#### 4) 包含層(第39図～第42図)

前述したように、調査区中央部、SD02を中心とする谷部分で、黒色粘質土の堆積層が認められ、この層の中からバンケース16箱分の土器が出土した。この遺物は谷地形が埋没する際に南側の台地上の地区から流れ込んだものと考えられ、実際出土した土器の多くが摩耗激しく、あるいは小破片を中心としたものである。遺物は大半が弥生時代中期に属するもので、古墳時代以降の土器も少量ではあるが認められる。また黒色粘質土中からこれらの遺物にまじって銅矛銚型が出土している。以下の報告もこれらの遺物を中心に行なう。

調査区北側壁面の土層観察によると、遺物の堆積状況は、谷部を埋める堆積土層のうち、暗褐色粘質土を主とする3層のうち下層の3d層、黒色粘質土を主とする4層のはほぼ全層に及ぶ。特に4層からの土器の出土が際立っており、出土遺物の大半を占める。各層毎から出土した土器の細かい時期差は認められず、土器の出土状況においても土器年代と層の上下関係に逆転がしばしば見られたことから、必ずしも単純な堆積状況を想定しうるものではない。

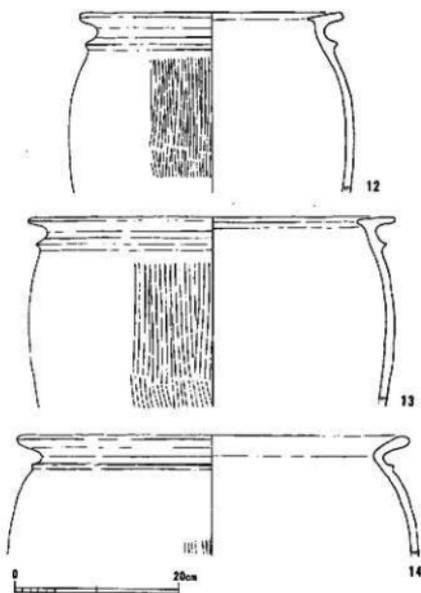
##### 甕形土器(第39図・第40図15・16)

12～14は比較的大型の甕形土器である。12は口径30.2cm、残存高22.0cm、胴部最大径34.6cm。口縁は逆し字状で、わずかに内側に突き出す。口縁下に1条の断面三角形突帯を貼り付ける。器壁が厚めで、外面縦方向ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。13は口径42.4cm、残存高23.3cm、胴部最大径44.2cm。口縁下に1条の断面三角形突帯を貼り付ける。外面縦方向ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。14は口径45.6cm、残存高14.6cmで、外面は縦方向ハケ目後ナデ消し、内面はナデ。口縁部はく字形で口縁下に1条の断面三角形突帯を貼り付ける。前出の2例より時期が下るものである。12～14の甕形土器はいずれも器壁が厚く、大型であることから、小型棺、中型棺として使用された可能性がある。

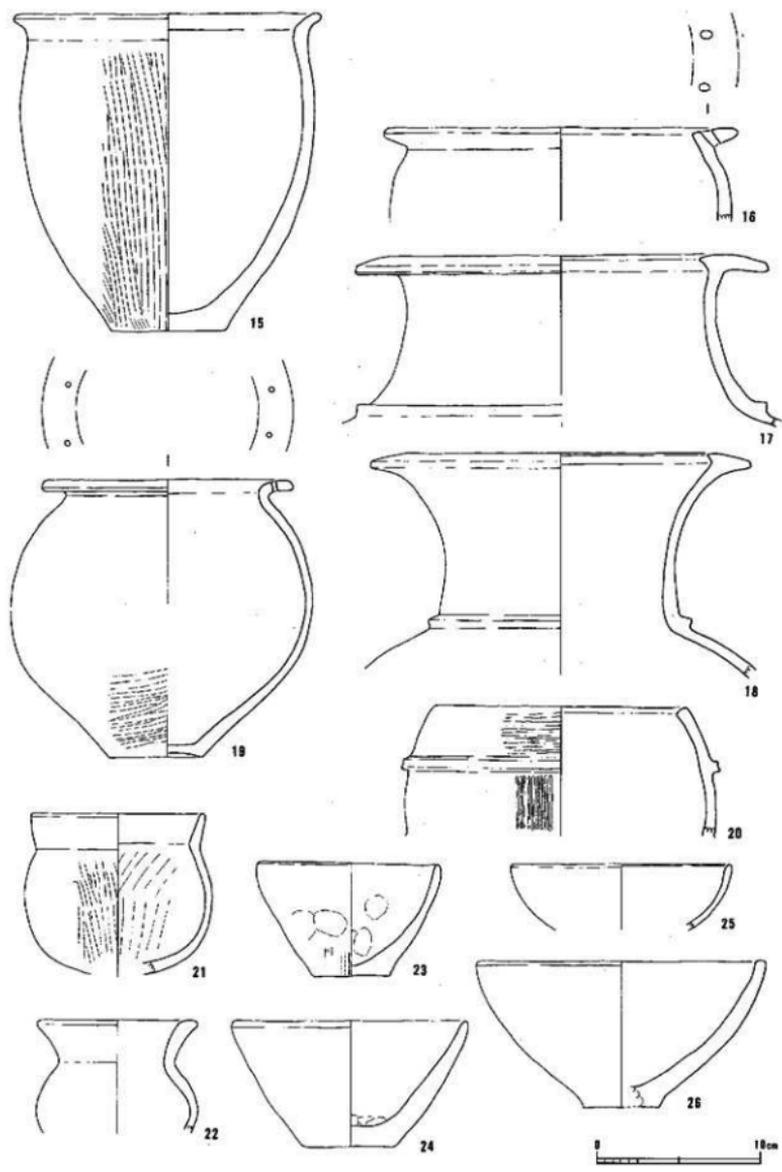
15は小型の甕で、口径18.2cm、器高19.3cm、底部径6.6cm、胴部最大径17.3cm。胎土は大粒の砂粒を含んで粗い。外面は縦方向ハケ目、内面は上位で横方向ハケ目、下位でナデ、口縁部はヨコナデ。16は口径11.4cm、残存高5.7cmで、口縁部に焼成前の穿孔を上から下に施す。内外面ともナデ。

##### 甗形土器(第40図17～22)

17～20は弥生中期、21・22は弥生後期後半に属する。17は口径30.0cm、残存高10.6cm。口縁は鋤先状で、頸部と胴部の境界に1条の突帯をつくる。外面は縦ハケ目後ナデ消し、内面はナデ、口縁部はヨコナデで、外面に丹塗り痕跡がわずかに残る。18は口径23.0cm、残存高13.7cm。口縁は鋤先状だが外側への張り出しが弱い。頸部と胴部の境界に1条の突帯をつくる。内外面は頸部、胴部ともにナデ、口縁部はヨコナデ。19は無頸甗で、口径14.0cm、器高16.9cm、底径5.6cm、胴部最大径18.5cm。口縁部



第39図 包含層出土遺物実測図(1) (1/6)

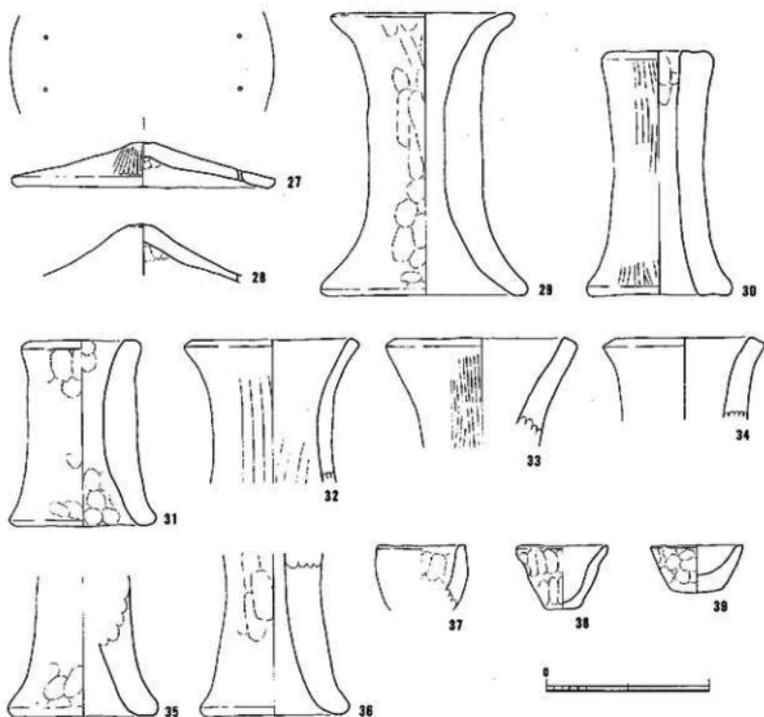


第40图 包含層山十遺物実測図(2) (1/3)

上面に穿孔が対照位置に施される。外面と口縁上面は横方向ヘラミガキ、内面はナデ。口縁上面～外面にかけて丹塗痕残る。20は口径15.0cm、残存高18.0cm、胴部最大径18.8cmで、胴部上位にコ字形の突帯を1条つくる。胴部は中位が張る形態になると考えられる。外面上位は横方向ヘラミガキ、中位は縦方向の暗文が入る。内面はヨコナデ。内外面ともに丹塗り痕がのこる。21は10.4cm、残存高9.8cm、胴部最大径11.4cmの小型丸底壺で、外面は縦方向ハケ目、内面はケズリで、口縁部はヨコナデ。胎土はやや粗く、薄暗褐色を呈する。22は口径8.0cm、残存高6.9cm、胴部最大径9.8cm。内面上位～外面全体にかけて丹塗り痕残る。内外面ともにナデ。口縁部ヨコナデ。

鉢形土器(第40図23～26)

23は口径10.7cm、器高7.0cm、底径4.6cm。外面はナデ、指オサエを施し、内面は指オサエとヨコナデで仕上げる。胎土は灰褐色でやや粗い。24は口径13.8cm、器高7.7cm、底径5.6cmで、外面口縁端部にこくわずかに丹塗り痕が残る。胎土は粗く、薄暗褐色を呈する。外面は上位で横方向ケズリ、下位で粗いナデ。内面上位でケズリ、下位でナデ、指オサエ。25は底部を欠く。口径13.0cm、残存高4.0cm、内外面全体に丹塗り痕がある。内外面ともナデ調整で、胎土は比較的細かい。26は口径17.6cm、器高9.0cm、底径4.6cm、外面は非常に丁寧なナデ、内面はナデで、口縁部はヨコナデ。胎土は細かく、薄明赤褐色を呈する。



第41図 包含層出土遺物実測図(3) (1/3)

#### 蓋形土器(第41図27・28)

27は器高2.7cm、底径16.0cmの平たい蓋状の形態をもつ。上面に丹塗を施し、一対の穿孔を設ける。最上位はナデで凹みをつくる。胎土は細かい粘土で上面はヘラミガキ、下面はナデと指オサエ。28は蓋の上部のみ残存する。最上面はナデで面を作り、上面はナデ、下面はナデと指オサエ。胎土はやや粗く、灰褐色を呈する。

#### 器台(第41図29-36)

ここで報告しているものはすべて円筒形のもので、完形のものとは上下対照のものが多い。29は器高17.2cm、口径11.1cm、底径11.8cm。上下が広がる形になる。外面はケ

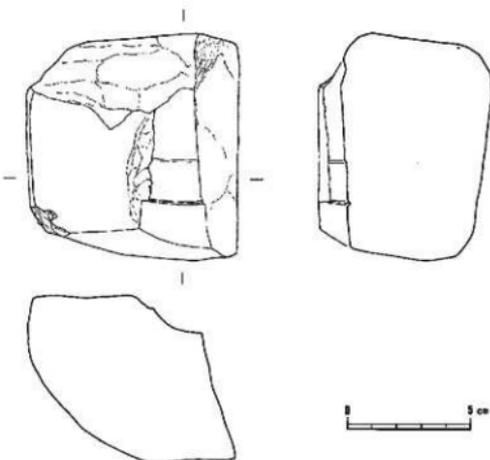
ズリ後ナデと指オサエで整形する。内面は上下面でナデ、筒部内面は未調整である。胎土はきめ細かく、薄褐色を呈する。30は器高15.0cm、口径6.8cm、底径8.8cmで、口縁端が開かず直立する形になる。外面は縦方向ハケ目、内面は指オサエと粗いナデで、筒部内面は未調整で絞り込み成形時の痕跡が残る。胎土はやや粗く、薄赤褐色。31はやや小型の器台で、器高11.2cm、口径7.2cm、底径12.8cmで、下方がわずかに開く。外面はナデと指オサエ、内面は指オサエ。胎土はやや粗く薄明褐色を呈する。32は上半分のみの破片で、口径9.6cm、残存高8.8cm、外面は縦方向ハケ目で、内面は上部がナデ、下部がケズリで、口縁端部はヨコナデで面を作る。胎土は細かく、薄淡灰褐色。33は上半分のみで、残存高6.6cm、口径11.1cm、上部がハ字に開く形で、外面は縦方向ハケ目、内面はナデで、口縁端部はヨコナデで面を作る。胎土は明薄褐色で粗い。34はほぼ直立する形と考えられ、口径9.8cm、残存高5.0cm、外面は幅広いナデ、内面もナデで、口縁端部はヨコナデで面を作る。35は下半分のみで、底径9.0cm、残存高8.5cm。外面は指オサエとナデ、内面は粗いヨコナデ。36は下半分のみで、底径9.0cm、外面は指オサエとナデ、内面はナデ。胎土は粗く、薄褐色を呈する。

#### 手捏ね土器(第41図37-39)

いずれも小型で作りが粗雑である。37は口径5.2cm、残存高3.9cmで、外面ナデ、内面指オサエ。口縁部は未調整で粘土返りが残る。胎土はやや細かく、灰褐色。38は口径5.4cm、器高3.9cm、底径2.0cm。外面は口縁部と底部の整形時の指オサエ痕が残り、内面はナデ。39は口径5.4cm、器高2.9cm、底径3.0cm。外面は全面指オサエ、内面は指オサエとナデ。胎土はやや細かく、薄灰褐色を呈する。

#### 青銅器鋳型(第42図)

黒色包含層中から前記の土器と同時に銅鋳型が出土した。整理段階で確認したので、4層中より出土したということ以外の詳細な出土状況は不明である。完形ではなく、基部の半分が残存するのみである。最大長9.3cm、最大幅9.0cm、最大厚6.6cmを計る。石材は砂岩質で、色調は薄灰白色である。各面のうち上面は砥石として転用され研磨を受けている。そのほかの面は破面を除いてはほぼ本来の形状を保っていると考えられる。鋳型面は円筒状に作られ、先がわずかに細くなる。段が1段、沈線



第42図 包含層出土遺物実測図(4) (1/2)

が1条あり、沈線は銅矛の端部を示すものであろう。鑄型から割り出した銅矛の復元径は基部端部で4.0cm、鑄型残存部先端で3.4cmである。鑄型面には熱を受けた痕跡がなく、この鑄型は実際には使用されずに廃棄もしくは砥石に転用されたものと考えられる。

### 3. 小 結

今回の調査は調査対象面積が狭く、また遺構の多くが削平を受けており、具体的な結果が満足に得られていない部分も多い。そのなかで、以下の2点に関しては検討を必要とすべき事柄であると考え、簡単ではあるが触れておきたい。

**SD07について** 今回の調査で東西方向に延びる溝状遺構を検出している。このSD07について、周辺調査区で出土している大溝の一部であるとの見方も考えられる。この見方は、164次調査SD01と本次調査区SD07が一連のものであると考え、124次、169次で検出された大溝とも有機的な関連を持つとするものである。額田駅(現在の野方)へ向かう官道がこの有田台地を通過していたともされており、これらの大溝がその側溝であるとの考えは十分踏まえなければならないと考える。

ただこの仮説の是非はともかく、本次調査のSD07に関しては次の2点から、これらの溝と関連づけるのは難しいと考える。まず、周辺地区で出土した大溝は、いずれも烏栖ローム層を切り込んだ状況で検出されており、標高10m前後で検出されている。これに対して、本調査区では標高8mで検出しており、レベル差が大きいのではないだろうか。また検出箇所も灰色シルト層からで、層的にも異なる。そのまま当てはめれば、本調査区と164次調査区の間で急激な段落ちが生じていることになり、不自然に思われる。また南側に平行する溝との間のレベル差も考えると、その中間はいびつな斜面になり、道路としては不適当に思われる。

また規模の点でも、周辺調査区で検出された溝がいずれも幅3～4m以上の規模であるのに対し、SD07は幅1mほどで、削平を受けていることを割り引いても小規模であることは否めない。他の溝がほとんど規模が揃っていることとあわせて、SD01は周辺の大溝とは異質であると考えるのが適当であろう。

ただ上記の意見はこの地点に官道が通っていたことを否定するものではない。したがって、この主題で周辺調査区間の遺構を比較検討する際に、本調査区のSD07は距離を置いて見たほうがよいと考える。

**銅矛鑄型について** 黒色包含層から出土した銅矛鑄型は、特に積極的に時期を決定する証拠を持たないが、同時に出土した遺物の大半が弥生時代中期後半を主とするものであることから、この時期に比定することが適当と思われる。そのほかにも、鑄型内面から想定される製品の形状、大きさからは中細銅矛と見られることもこの鑄型が中期後半に属する有力な証左となっている。ただ以下の点で中広形的様相も見られる。鑄型の石材は中広形以降に主に使用されるものであること、鑄型の背を丸く仕上げたものも中広形以降であることがそうである。

有田遺跡群ではこれまでに、第3次調査、第81次調査、第108次調査で鑄型片が出土しており、今回が4例目の出土となる。これまでの鑄型片の出土位置は、すべて本調査区のすぐ南側の台地中央部に集中しており、今回出土した鑄型片もこの地区から流れ込んできたものと考えられる。有田遺跡群のなかでもこの限られた地区から4例もの鑄型片の出土があることからみて、この地区に集中的な青銅器生産の中心があったと考えることができよう。早良平野全体でみても鑄型の出土例は多くなく、対して青銅器自体の出土例は時間差はあるが、比較的多く見られることから、この銅矛鑄型の意義を考える際には早良平野全体を視野に入れる必要があるだろう。

## VI. 結 語

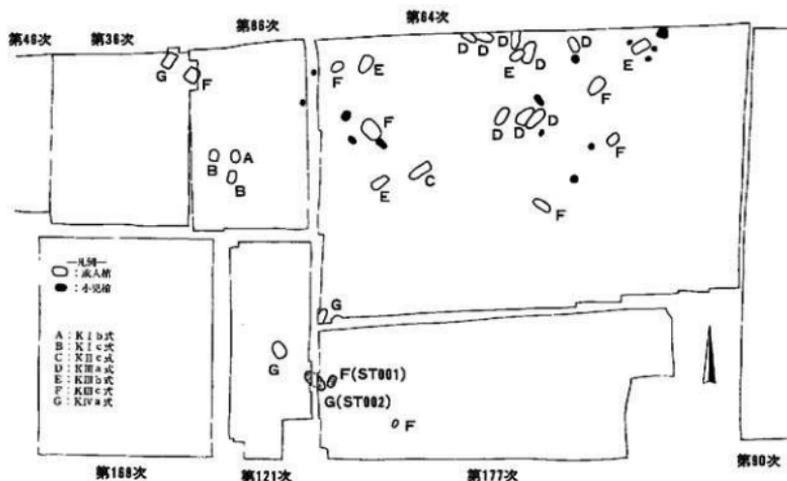
第177次調査では銅鏡を副葬したST001・002が確認されたことによって、多岐にわたる諸問題を提示している。本章ではこれら甕棺墓の本遺跡群内や早良平野内での期的・構造的な位置づけおよび2面の銅鏡について検討を加えることとする。

### 1. 有田遺跡群内における甕棺墓地

これまで本遺跡群内で検出された弥生時代墓地は第43図に示すようにA～Gの7地点が挙げられる。A地点は第177次調査区を含む前期後半から後期初頭におよぶ本遺跡群内の最大規模の墓地で、第36次・64次・86次・121次・175次・177次の6調査区で44基が確認されている。第175次調査区のST001は他調査区で確認されている墓地群から隔絶していることや、中世期の同調査区SD003には甕棺片が多量に混入していることから、墓地は2群に分離する可能性がある。ここでは、同調査区を除いた墓地群(第44図)について第177次調査ST001・002の期的位置を含めた墓地の時間的推移に主眼をおいて、墓地構造について分析を行なう。まず、該地出土の甕棺を橋口達也氏の編年<sup>1)</sup>に依拠しつつ、時間的組列を示す。当墓地における甕棺墓の萌芽は第86次2号甕棺(K1b式)の前期後半に認められ、上甕には壺形土器の形態をよく残す。K1c式には同1・3号甕棺が該当し、口縁部径に対する頸部径の拡大が図られ、棺としての機能性を増している。つづくKIIa・b式は欠き、KIIc式に該当するものとしては第64次K21が挙げられる。口縁部は外傾気味の「T」字形を呈し、胴部上半が下甕は底部にむかってすばまるのに対し、上甕は胴部突帯位置まで、直線的な形態を有し、後出的要素がある。なお、双方ともに口縁部下に突帯を付さない。KIIIa式に相当するものとしては、同K3(下)、同K4(下)等があり、K21(上)の口縁部下に突帯を付した器形となる。KIIIb式としては同K10(下)、同K16(下)等が挙げられ、胴部最大径位置から口縁部下のすばまりが緩いカーブとなって表れる。口縁部は上面が水平な「T」字状を呈するものが多い。KIIIc式としては同K23(下)、第36次2号甕棺(下)等があり、上述の胴部上半のカーブが明瞭で、口縁部は内傾気味の逆「L」字状を呈する。また、前代の「T」字状口縁の名残が内唇部の突出として遺存するもの(第64次K32等)もある。つづくKIVa式で該地の墓地は終焉しており、口縁部の内傾度や口縁下のすばまりが強まる第36次1号甕棺(下)、第121次ST01等が例として挙げられる。以上、口縁部形態、器形の2属性を主体に当該墓地内での甕棺の変遷を概観してきた上で、第177次調査のST001・002の編年の位置付けを行なうと、ST001(上・下)、ST002(下)がKIIIc式となり、ST002(上)は口縁部の形態からKIVa式に該当するが、肩の張りが強く特異な器形を呈する。類例としては口縁部を打ち欠いた第64次調査K22(下)が挙げられ、この上甕はKIVa式の特徴を有する。ST001・002を比較すると上述した属性の時間的推移からは002が後出的



第43図 有田遺跡群における弥生時代墓地位置図(1/15,000)



第44図 A地点雙棺墓配置図(1/500)

要素(002下壘の口縁部内傾度の強い点、002の突帯は全て断面三角形である点等)を有することや両者の検出状況から埋葬当時に墓塚の重複も推測されることから、1時期程度の時間的差を考慮する必要性がある。ただし、ST001(K IIIc式+K IIIc式)、ST002(K IIIc式+K IVa式)という図式から後期初頭まで中期末の雙棺が残り、埋葬に使用されたという解釈のみで整理するのではなく、002にみられるセット関係が一定量で認められるのであれば、上下雙棺の使用(埋葬)時期の確実な同時性を重要視した上で、新たな時期設定の必要性も生じよう。ただし、検討を加えていない現段階ではST001を中期末、ST002を後期初頭とするものの、川上洋一氏による日常土器と雙棺の編年における中・後期の二期設定に関する鯨鮪の指摘や、高橋徹氏による後期初頭の指標である桜馬場雙棺の時間的問題についての提示等をふまえると時期比定には慎重にならざるを得ない。ただ、両者に時期差を寄与し、ST001をK IIIc式期、002をK IVa式期という見解は異論のないところであろう。以上の時期をまとめてA期(K I b式)、B期(K I c式)、C期(K II c式)、D期(K IIIa式)、E期(K IIIb式)、F期(K IIIc式)、G期(K IVa式)と仮称する。

また、A地点での墓地範囲は周辺調査状況から北限を除き、三方は限定されることから、東西約60m、南北40m以上の墓群を想定し得る。また、第177次調査区西側から第36次・86次調査区の境界部分にかけて支尾根線が位置していることから、この尾根線を含む東側緩斜面にかけての立地を指摘し得る。まず、尾根線付近にA・B期の墓地が形成される。つづくC期まで雙棺墓はみとめられず、該期の1基は尾根線を下った斜面方向に並行に築かれる。D期では更に斜面を下った位置に比較的まとまりを有する墓群があり、更に北側への延長が看取される。E・F期では既存の墓地を取り囲むように不規則に散在する。ただし、F期に属するST001の立地はそれより隔絶した尾根線の高所に立地していることは注目される。また、G期においてもST001の周囲にはST002を含む数基が加わり墓群が形成されている。このように銅鏡を副葬する兩雙棺墓は当該墓地中で分離した最高所に位置し立地にお

いての優位性も認められる。なお、遺構配置図(第19図)に示したようにST001の東側には小規模ではあるものの、段落ちが認められ、地山を削り出し、区画を形成していた可能性があるが、削平により上層に包含層が遺存していないため形成時期については不明であることや、段落ちの方向が現在に地削りに平行していることから、極めて消極的な示唆にとどめたい。

本遺跡群内での甕棺墓地のありかたは7地点に分布が認められ、E地点が支丘基部に立地するものの、他地点は丘陵の端部に占地するという共通の立地条件を有する。また、時期的には前期末の段階で、小規模に散在するものの中期以降は古地北端への集約が看取され、墓地としての意識が集団内にあったことを伺わせる。当時、海が古地北側近くまで湾入していたと考え合わせると興味深い。なお、G地点では前期末に該当する2号甕棺墓から細形銅戈が出土しており、有力者層出現の萌芽をここに確認することができる。

## 2. 銅鏡について

### 前漢鏡

ST001出土の前漢鏡は岡村編年<sup>4)</sup>の漢鏡3期(異体字銘帯鏡Ⅱ式)に属するものである。

国内出土例のうち、いわゆる重圏文系の大形鏡を除いた直径10cm前後以下の鏡としては三雲南小路2号甕棺墓(直径11.4cm)、古武樋渡62号甕棺墓(直径6.9cm)、立岩28号甕棺墓(直径9.8cm)、同39号甕棺墓(直径4.9cm)、隈西小田13地点23号甕棺墓(直径9.9cm)出土に続き6例目(直径7.55cm)で、文様構成は鉞座文様がやや異なるものの立岩39号甕棺墓出土鏡に類似する。銘文はいわゆる「昭明鏡」に用いられる「内清質以昭明 光輝象夫日月 心忽揚而順忠 然塵塞而不律」の減字である。小形(直径5~8cm)の鏡群では内行花文系も含めて、「日光鏡」と一般に呼称されるように「見日之光 天下大明」の銘文を採る例が多く、洛陽燒溝漢墓においても直径6.2~8.0cmを測る「日光鏡」(第四型 第一式)には1例(見日□□□大毋忘)を除き、同文の銘を有する。また、同墓出土の直径8.2cm~15.0cmを測る「昭明鏡」(第四型 第二式)には通有の銘文(減字の銘が多く含まれる)をもつことから希有な例といえる。なお、本例の減字は管見の限りでは、韓国 伝池山洞出土鏡(直径8.2cm)に1例を挙げると、字間にはST001鏡同様に溝文(ただし、巻きが強い)を配置する。なお、この内区には内行花文を配している。

また、弥生時代の前漢鏡副葬墓例としては16遺跡、23基目となる。このうち、銅鏡1面のみの副葬例は23基中4基にしか認められず、金属製武器や装身具を伴うものが大半を占める。早良平野内での同時期の前漢鏡副葬墓例(古武樋渡62号甕棺墓：前漢鏡1面・鉄製素環頭大刀1口、丸尾台甕棺墓前：漢鏡3面・鉄製刀子1口)の副葬同伴遺物と比較しても質量に劣性が首肯され、墓地内での立地に優位性はあるものの、共同墓地としての範疇からは脱却していないことから、平野内での被葬者の位置付けを如実に物語っている。

### 小銅鏡

小形仿製鏡は高倉洋彰氏によって、大きく2群に分類されており、「内行花文日光鏡系仿製鏡」および「重圏文日光鏡系仿製鏡」とよばれている。今回のST002出土鏡は内行花文を有さず、後者に含まれ、そのうち第1型b類に細分されるものである。この第1型は韓鏡として位置づけられる鏡群で、a・b類の区分はモデルとなった原鏡とのヒアタスによって2分されるが、明確な分類上のメルクマールはない。重圏文系の第1型鏡は出土地不明品を除き、韓国に13面(2遺跡)、国内に本例を含めて10面(10遺跡)が出土している。韓国例の漁隱洞遺跡(9面)、坪里洞遺跡(4面)の出土鏡については小田富士雄氏による詳細な総括的研究があり、国内出土鏡との同范関係が明確になっている。本例については、現在のところ、同范関係は認められないものの、小田氏分類の漁隱洞遺跡出土C鏡(第45図：面

径5.2cm)に文様が類似しており、C鏡の外区凸線から派生させる蕨手状文や三角形文を省略化した図文(蕨手状文の巻き方向や数は異なる)を有する。また、斜行櫛歯文も同方向に振れをもち、銅質も類似する等、同範囲内ではないものの、強い系譜上の関連が看取される。

国内出土例のうち、伝世と考えられる後期後半以降の出土鏡や時期不明鏡を除くと、本例も含めた3例(横隈狐塚遺跡63号土墳墓、二塚山遺跡46号甕棺墓)は全て北部九州の墳墓副葬例である。横隈狐塚例は報文によると検出状況より後期前半代が想定され、二塚山例は甕棺の口縁部の内傾度や口縁下のすばまりから本例より後出的でKIVb式の所産であると考えられる。韓国の2例の時期については先の小田氏の研究によって1世紀前半代を上限とした所見があり、国内の出土例も時期的に矛盾はない。なお、この第I型の鏡型出土例は両国において現在のところないが、国内では1遺構から1面の出土であるのに対し、韓国では複数面の出土状況が認められることは、これら鏡群が韓鏡である傍証となり得よう。今回の出土例から、韓国での製作と時期差が殆どないまま国内に舶載され、副葬されていることが、明らかになった。前項で述べたようST001とST002の時期差および前者の鏡群を模倣した鏡が後者に副葬されていた事実を勘案すると大陸との恒常的な交流が想起されると同時に前漢鏡と後漢鏡との流入時期の間隙を考慮する必要性もあろう。



第45図 漁隠洞遺跡出土C鏡(1/1)

### 3. おわりに

平野内における弥生時代の副葬品を有する墳墓については、小林義彦氏によって詳細な検討が加えられ、前期末に副葬品を有する墳墓例からその継続性に着目した上で、本遺跡における中後期の副葬墳墓の存在を予見していた。また、平野内でのヒエラルキーについても今回の調査結果によって、同氏の見解に矛盾はない。ただ、副葬品の質量ともに他の墳墓を凌駕し、前期末から中期末まで継続する吉武遺跡群においてさえも断絶する「後期初頭」における平野内での副葬例は初例で、ST001・002における銅鏡副葬の継続性は、ある一定期間継続した首長層が本遺跡群内に存在した証左といえよう。

本章で検討を加えた諸問題は多岐にわたっており、力量の及ばない点が多々あることや紙面の都合上からも、別稿に改めたい。平野内における甕棺の細年の整理および中後期の境界設定についての問題解決を当面の課題としておきたい。

最後になりましたが、本章をまとめるにあたりまして、近藤喬一、小田富士雄、高倉洋彰、橋口達也の諸先生を始め、多数の方々からご教示を頂きました。末尾ながら、記して感謝いたします。

#### 註

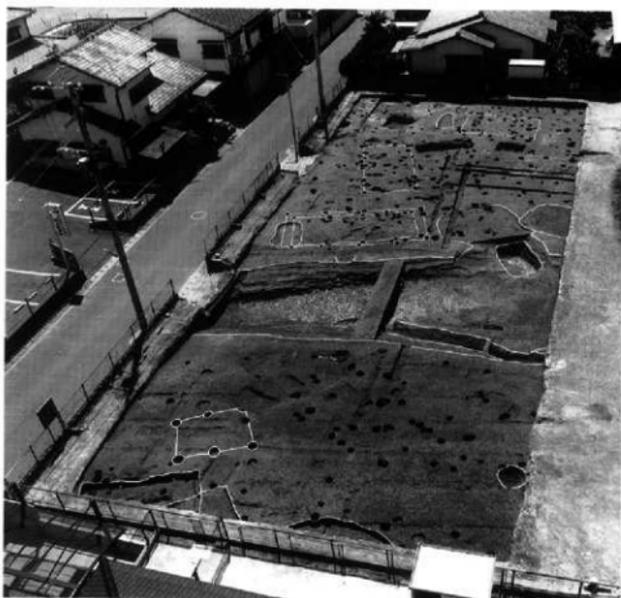
- 1) 橋口達也「甕棺の細年の研究」(九州産官自動車関係歴史文化財調査報告)31中巻 福岡県教育委員会) 1979年
- 2) 川上洋一「弥生時代の北部九州における甕棺と日常容器の併行関係に關して」(『福原考古学研究所論集』第11 福原考古学研究所編 吉川弘文館) 1994年
- 3) 高橋 徹「塚馬場遺跡および井原原遺跡の研究」(『古文化叢書』第32集 九州古文化研究会) 1994年
- 4) 岡村秀典「前漢鏡の細年と様式」(『史料』第67巻第5号 京都大学文学部史学研究会) 1984年
- 5) 高倉洋彰「前漢鏡にあらわれた地産の象徴性」(『国立歴史民族博物館研究報告』第55集 国立歴史民族博物館) 1993年を参考とした。
- 6) 高倉洋彰「日本金属器出現期の研究」(学生社) 1990年
- 7) 小田富士雄「日・韓地域出土の同范小銅鏡」(『古文化叢書』第9集 九州古文化研究会) 1982年
- 8) 小田富士雄氏のご教示による。
- 9) 小林義彦「弥生墳墓の構造と変遷」(『飯倉遺跡遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第387集 福岡市教育委員会) 1994年

# 図 版

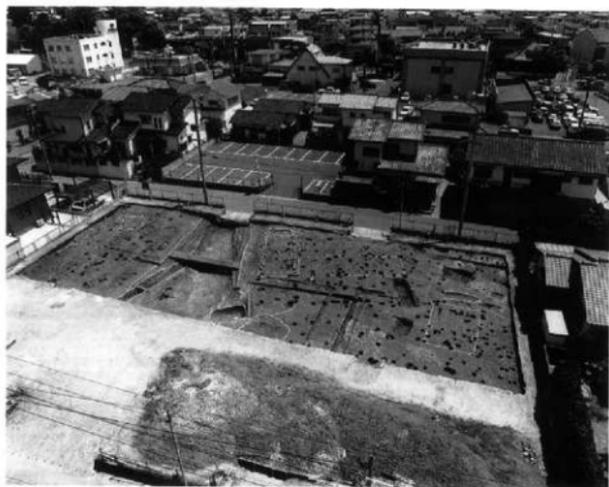


第177次調査ST001銅鏡出土状況

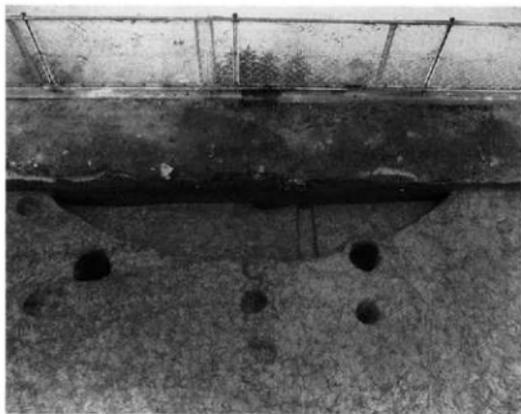




(1)調査区全景(東から)



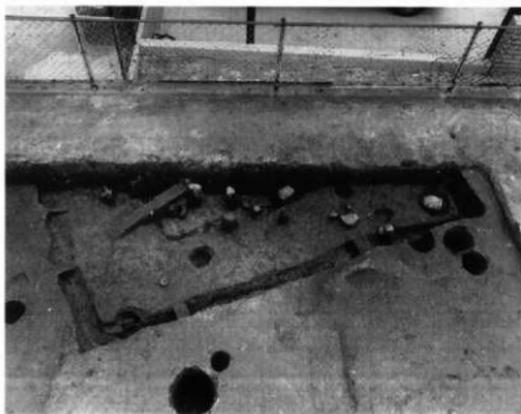
(2)調査区全景(北から)



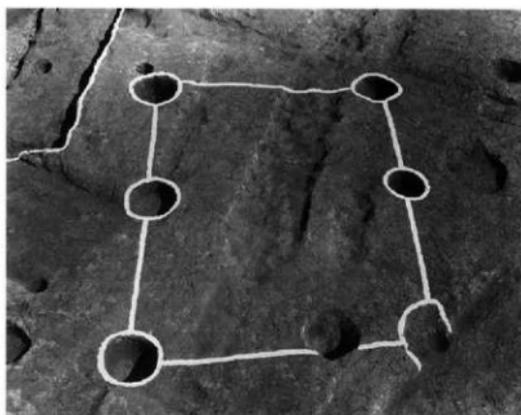
(1)SC010(西から)



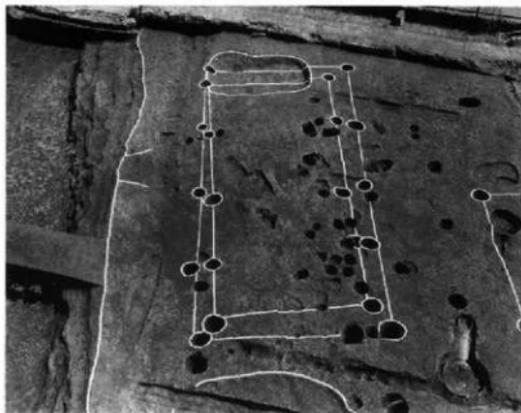
(2)SC011(西から)



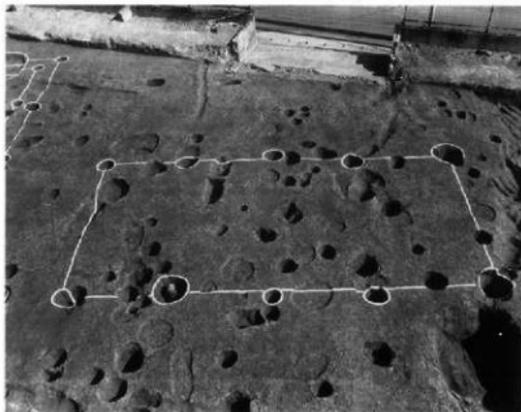
(3)SC012(西から)



(1)SB051 (北から)



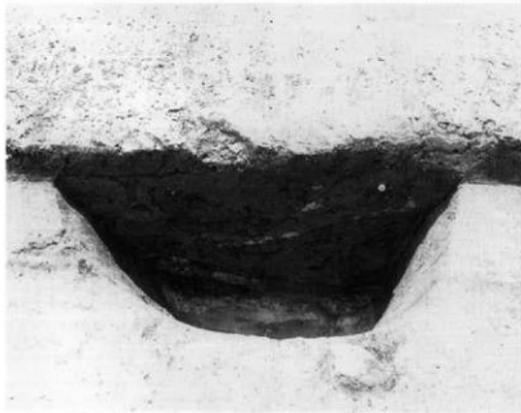
(2)SB052・053 (北から)



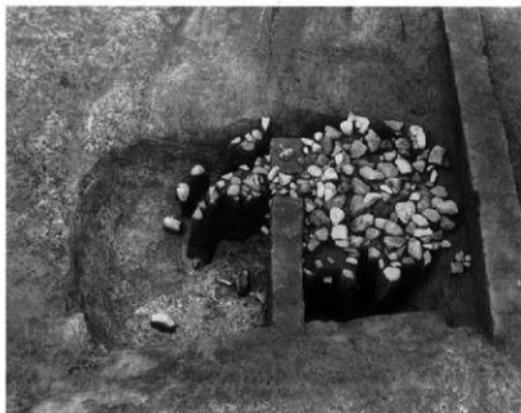
(3)SB054 (北から)



(1)SK005(北から)



(2)SK006(北から)



(3)SK015(北から)



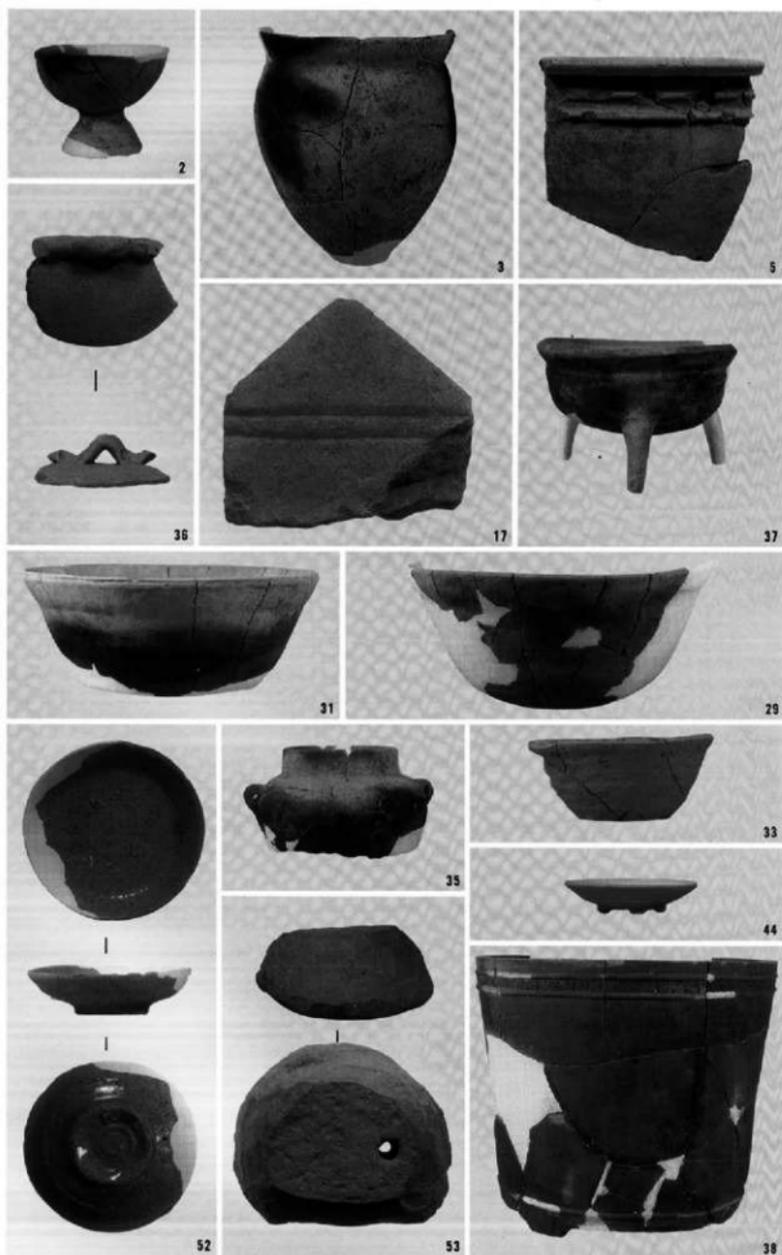
(1)SD003(北から)



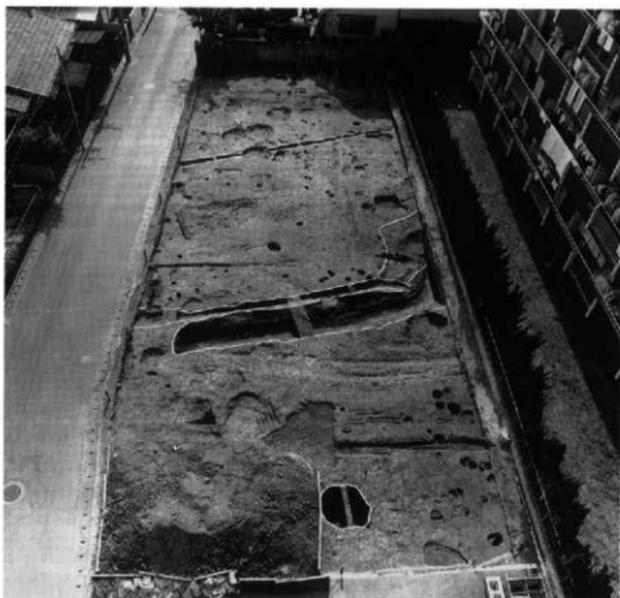
(2)SD016(南から)



(3)SP009(西から)



第175次調査出土遺物



(1)調査区全景(東から)



(2)調査区全景(南東から)



(1)ST001-002(南東から)



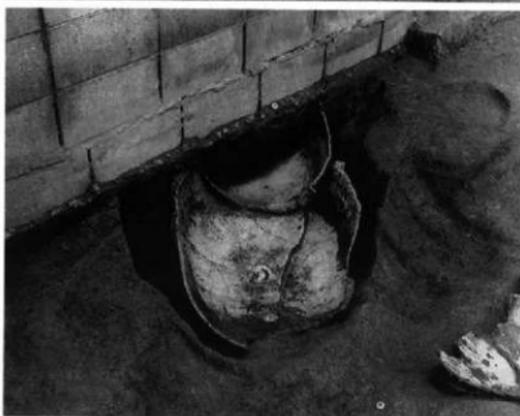
(2)ST001(南東から)



(3)ST001(北東から)



(1)ST001銅鏡出土状況



(2)ST002(南東から)



(3)ST002銅鏡出土状況



(1)SK010(南から)



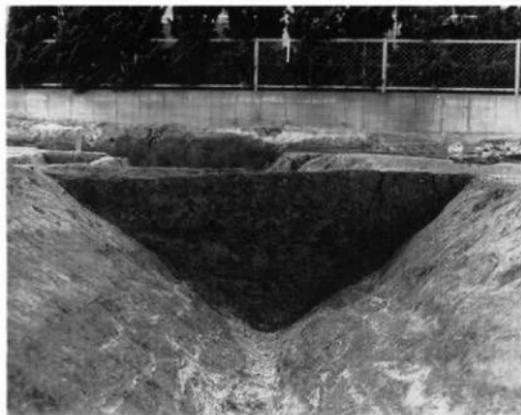
(2)ISU005(東から)



(3)ISU006(北から)



(1)SD007・008・009(南から)



(2)SD008(南から)

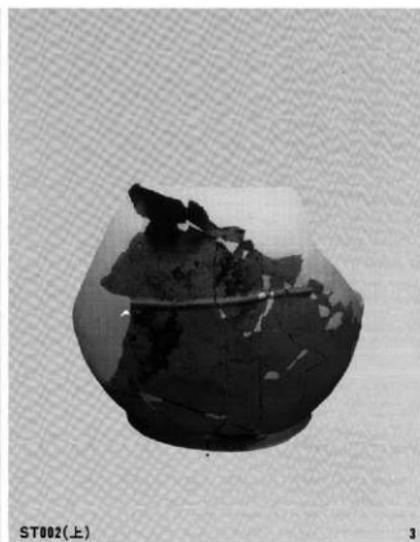


(3)SD012(南から)



ST001(上)

1



ST002(上)

3



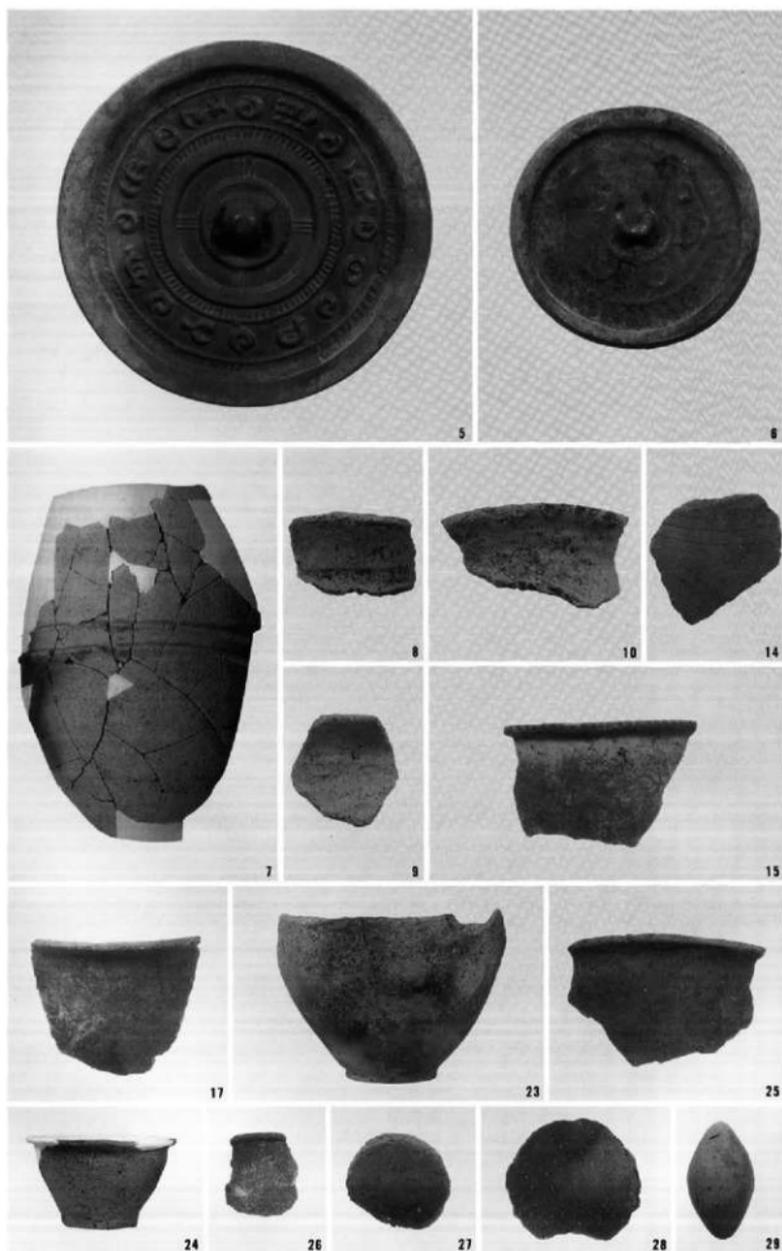
ST001(下)

2

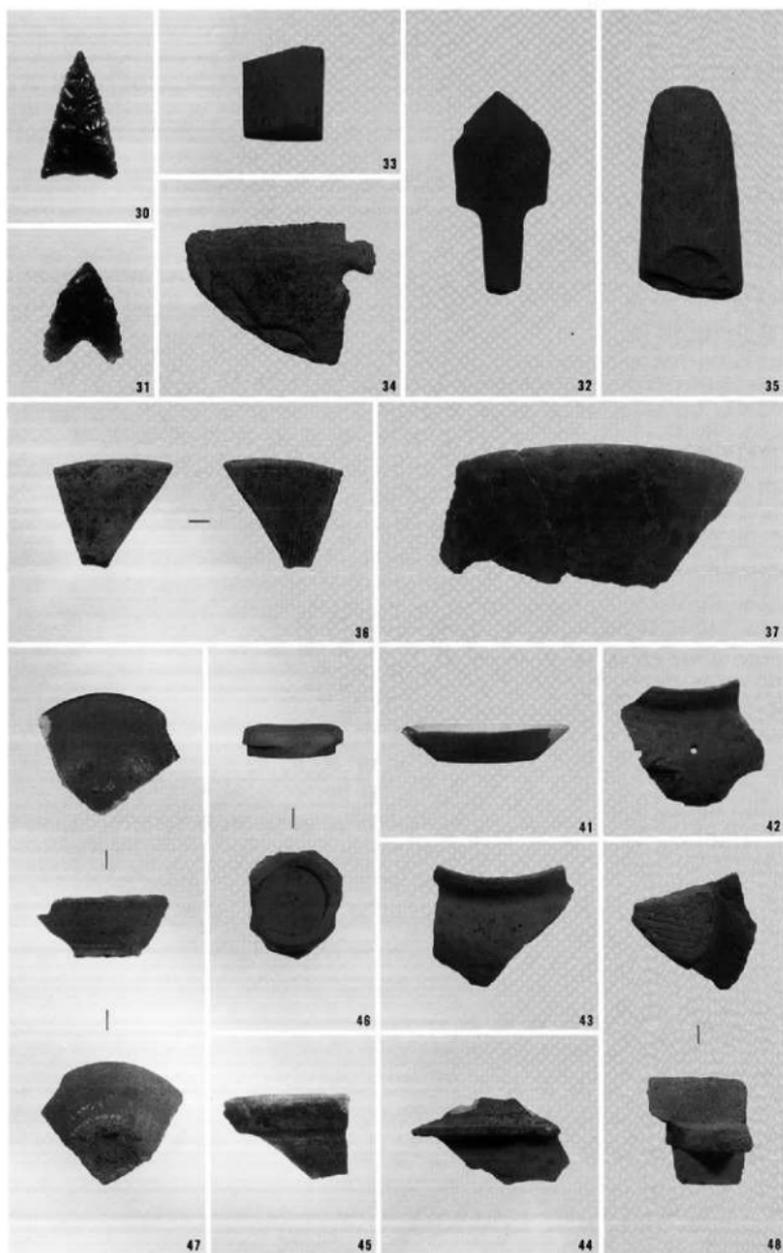


ST002(下)

4



第177次調査出土遺物(2)





(1)調査区全景(北西から)



(2)調査区北壁土層



(3)調査区東壁土層



(1)SC01(北から)

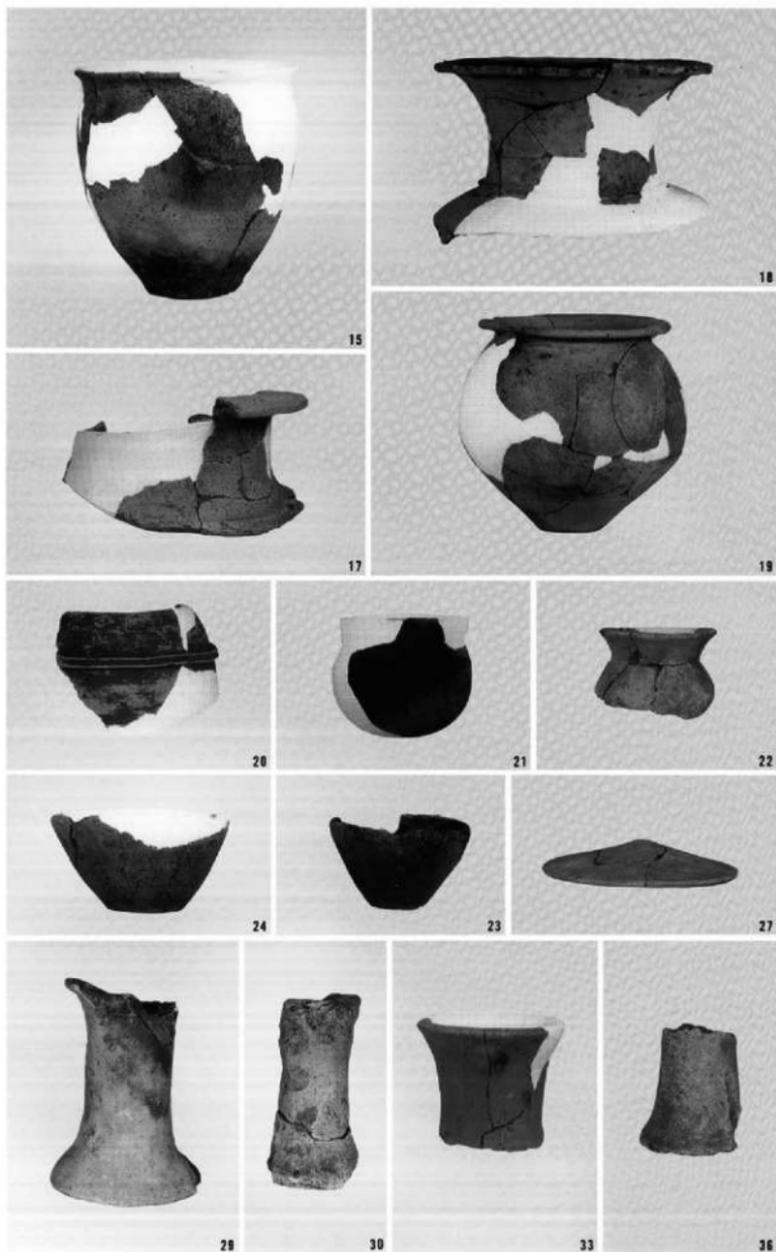


(2)SK04(南から)

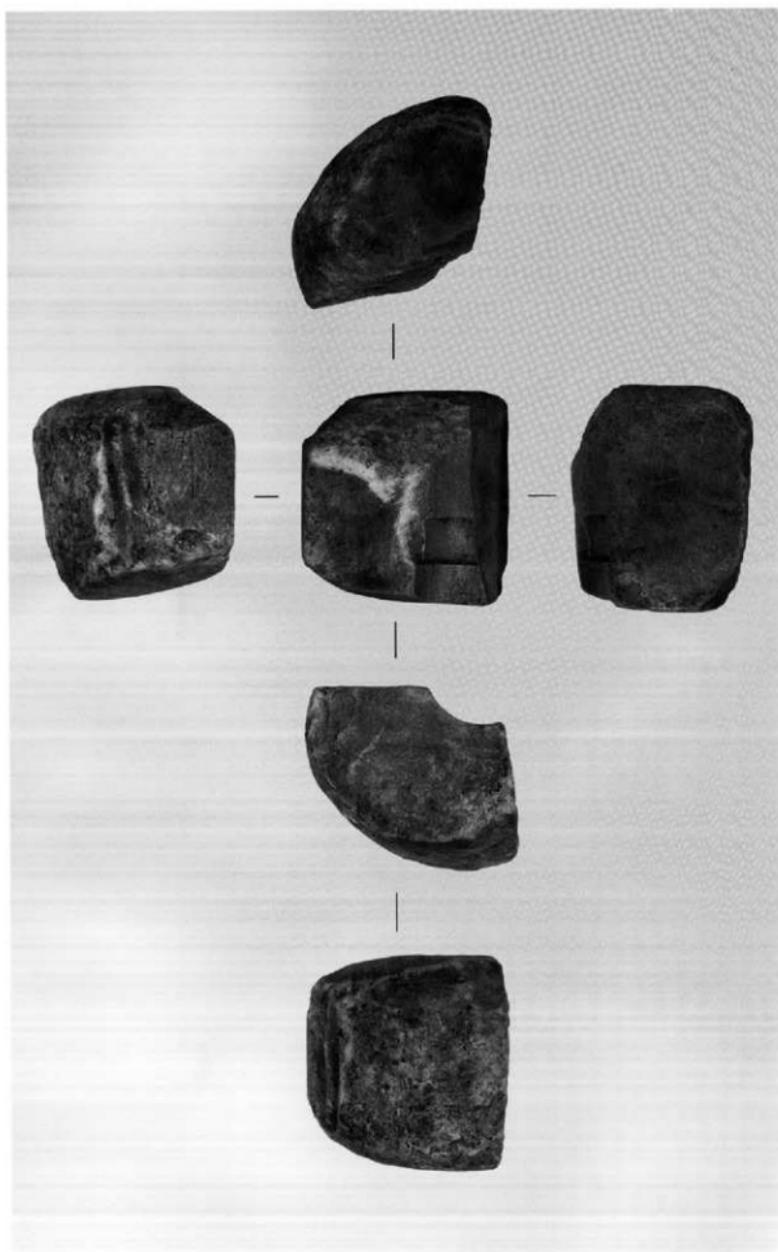


(3)SD07(南から)

第179次調査



第179次調査出土遺物(1)



第179次調査出土遺物(2)

---

ARI TA KO TA BE  
有 田・小 田 部 28

—有田遺跡群第175次・177次・179次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第513集

1997年（平成9年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

〒810 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 セントラル印刷株式会社

〒810 福岡市中央区大宮1丁目5番13号

---



